



297号

湘南発

毎日生きてるお互い同士

浮田久子さんに第5回地の塩賞

浮田久子	戦争とわたし —— 受賞のお礼に代えて
阿部知子	守る平和から、紡ぐ平和に
鈴木圭子	平和の白いリボン行動・藤沢
芝実生子	市民がつくった藤沢市非核平和条例
矢口仁也	〈いのち〉を守る講座を続けて
大久保さわ子	山川菊栄先生と私
太田阿利左	「父と暮せば」と「華氏911」
〈新連載〉	「粘土だんご」で地球を緑に 本間裕子
〈新連載〉	足もとから日本を変える＝地域議員の声 佐藤ひろこ



この ひろい宇宙に
たったひとつの地球

その大きな地球に

たった一人のわたし
そして あなた

かけがえない地球

かけがえないわたし

かけがえないあなただから

たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

この ひろい宇宙に
たったひとつの地球

たった一度きりの人生だから

思い切り

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の奥まで深く息をし

ああ 生きていてよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

△あごろ▽ 人と人の出会うひろば

△あごろ▽ 人と人の共に生きるひろば

浮田久子さんの地の賞を祝って

女性運動は、運動自体が《地の塩》のような仕事だが、その地味な仕事を続けている女性たちが呼びかけた《白井博子・地の塩賞》は、毎年、女性や社会のために《地の塩》の働きをなさった方に、感謝の賞をお贈りしている。第五回は、多年、女性・平和運動を続けてこられた《白いりボン平和運動》の提唱者、浮田久子さんが受賞者に決定。二月一三日、江の島の《かながわ女性センター》で、贈呈式が行われた。

ちょうど藤沢市長選と重なり、当日の参加者は少なかつたが、あの《戦争》を経て人間として女性として苦難の中に成長してこられた浮田さんの《受賞の言葉》は、聞き入るすべての人の心に深い感動を与えた。

信心深いキリスト教徒である浮田さんは、まず《地の塩》の意味から問い直し、戦中・戦後の苦難に耐えて戦後の女性解放の動きのなかで生きた自らが、どのように《社会人》に育っていったかを率直に語ってくださったお話は、そのまま「現代日本女性史」としても興味が尽きないものだった。

夫を徴兵され、幼児たちの食糧の確保に苦難の限りを尽くした一人の《母》が、戦後、選挙権を得、子どもの通う学校の《父兄会》が《PTA》に変わって女性が主流になるなか、教育のありかたにも発言権を得る。同時に《市民》としての活動の中軸を担うことにもなり、市の平和条例などを実現させるなかで、さらに国際的な平和運動にまで活動の場を広げてゆく……。

いま行く手を失っているように見える日本のなかで、未来を拓いていくのは、このような《地の塩》の方がたであろうと、改めて力を得た集いだった。

浮田さんは、《あゝ湘南》の中軸の方でもある。共に《湘南》に拠点を置く仲間たちが、日常の活動や、思いの一端を述べて、浮田さんのご受賞を祝う号とした。

毎日生きてるお互い同士 目次

戦争とわたし——受賞のお礼に代えて……………	浮田久子	4
守る平和から、紡ぐ平和に……………	阿部知子	38
〈平和の白いリボン行動・藤沢〉……………	鈴木圭子・深川博子	40
市民がつくった藤沢市非核平和条例——全国に先がけた条例誕生とその後……………	芝実生子	52
〈いのち〉を守る講座を続けて——藤沢における〈いのちの講座〉……………	矢口仁也	58
山川菊栄先生と私……………	大久保さわ子	60
■笑って怒って 4 東京に タカまいおりて 軍国化……………	橋本 勝	67
■めじやーなりすとのめ 「父と暮せば」と「華氏911」……………	太田 阿利佐	68

■沖縄から 宜野湾市に、ついにヘリ墜落	浦島悦子	70
《新連載》「粘土だん」で地球を緑に 1	本間裕子	76
《新連載》足もとから日本を変える 1	佐藤ひろ子	81
熟読日本国憲法 2	ふるかわひろし	88
■TOPICS 機会均等法改正案まとまる／政府が示す二〇二〇年の女性未来像 ほか		90
■会と催し 米軍ヘリ墜落に抗議する緊急集会／今年も嵐山でフォーラム ほか		95
■あいら試写室 「父、帰る」		98
■読書室 『沖縄差別と平和憲法 日本国憲法が死ねば戦後日本も死ぬ』／『おふくろのいる風景』		
『eデモクラシーへの挑戦 藤沢市市民電子会議室の歩み』		100
■あいらのあいら		104

戦争とわたし——受賞のお礼に代えて

浮田久子

このたび、全く思いがけずも、《地の塩賞》という立派な賞をいただくことになりました。日ごろそういう賞というようなものとは無縁なところで働いているものですから、驚きと戸惑いとは先行してしまつて、「困ります、困ります」と、がんこに言い張つたりして、《あごろ》の皆様にも、すっかりご迷惑をおかけしてしまいました。それでも折角のご好意をむげにお断りするのは、礼を失することと反省し、恐縮しつつありがたく頂戴することにいたしました。有難うございます。

自分自身の内に《塩》を持つのが《地の塩》

《地の塩》という言葉の出処は、私の知るかぎり、新約聖書（マタイ5—13、マルコ9—49、50、ルカ14—34、35）のキリストの言葉です。それによると、「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、何の役にも立たず、外に投げすてられ、人々に踏みつけられるだけである」「人は皆、火で塩味を付けられる。塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によつて塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい」とあります。賞を頂くというので、これらの聖句を読み直してみても、その意味するところが、如何に深くきびしいもの

であるかに、あらためて気づかされたことでした。

〈平和〉にこだわり続けて六〇年

神奈川新聞の記者の方との短いインタビューのなかで申し上げましたが、わたしたちの〈平和の白いリボン行動・藤沢〉は、例の二〇〇一年九月一日の大惨事のと、恐怖と憤怒の空気のなかに息づまる思いをしているに違いないアメリカ人の友達に電話をした、そのやりとりのなかから生まれました。報復を叫ぶ險悪きわまる雰囲気の中で、こんなとき、黙ってられないアメリカの平和を愛する人びとが、少数ながら敢然として、早くもピース・ウオークを始めているという。平和の意思表示としての白いリボンを胸につけて街を行く大学生……。私たちも、せめて、彼らに連帯して、確固とした、平和への意思を公に表しましょう。そしてお互いにはげまし合いましょう、と……。

そんなわけで、日ごろの平和の友だちのあいだで、自然発生みたいに生えだした運動でしたが、それは、日本でも、藤沢だけではなく、まず神奈川県内、横浜とか茅ヶ崎、平塚、大和、それから東京のほうぼう、京都、大阪、北海道、九州などにも広がって行きました。これは望外のことでしたが、こういう広がりがかたに手応えを感じます。ともすればめげそうになる難しい状況のなかにも、これは心底深くに響いて、私たちに希望と勇気をもたらしてくれるものですから。



私がこの年齢になるまで、何かにつけて能力の衰えをひしひしと自覚しながらも、なぜ、こんなにまで平和にこたわるのか、平和のために働かずにはおられないのか、やっぱり、小さいときから自分の生きてきた道程で身についたもの、というより、与えられたものの故^{ゆえ}だとしか考えられません。

私は、四、五歳のとき父の仕事の都合でアメリカに住んでいました。公園に行くと、悪童？たちから指差して「ジャップ！ジャップ!!」と言われたことがありました。そのころアメリカでは、日貨排斥運動というのが一般の人びとの間にも広がっていたことをあとになって知りましたが、子ども心にも、たいへんな怒りをおぼえたことを今も忘れません。だから、ひとを差別することを、自分にも他のひとにも、ほとんど本能的にゆるせない人間になったのだと思っています。

深まりいく軍国主義の中で育って

帰国して小学校五年生のとき、浜口雄幸首相が東京駅の階段で、佐郷屋留雄という男に狙撃されて、後に亡くなりました。これがそのあとに続く、政・財・軍・各界の要人のあいつぐ暗殺事件の始まりだったと記憶しています。

翌々一九三二年、前の大蔵大臣、また、三井合名の理事長が血盟団に暗殺された衝撃もまだ消えない五月一日、時の総理、犬養毅首相が海軍の青年将校たちによって「問答無用」の一言のもとに官邸で射殺されました。その数年後、一九三六年には、かの二・二六事件です。もうたくさん、やめて、やめて！と心のなかで絶叫しても、どうなるものでもありませんでした。その間、六年生のとき（一九三一年）満州事変。中国への侵略戦争の始まりです。軍部の横暴が目には余るようになりました。一九三八年、

国家総動員法が議会で討議されていたとき、法案の違憲性を批判した議員に、佐藤賢了という陸軍中佐が「だまれ」と一喝。法案は成立しました。なにがどうあれ、軍部の独走態勢ですべてが決まっていたのです。昭和史の年表を繰ってみると、当時のことが、まざまざと思い出されて、やりきれません。

太平洋戦争の中でのくらし

日中戦争で泥沼にはまっていた日本が、一九四一年、新しい戦争（太平洋戦争）に突入しました。当時のことを思い出すままにお話ししてみましよう。

私はその前年結婚していて長男が生まれていましたが、夫の任地である仏領印度支那（現在のベトナム）に渡りたくても海上が危険で渡航をあきらめなくてはなりませんでした。はじめ東京におりましたが、空襲で危険になったので、子どもと二人、辻堂にきていました。サイパン島守備隊が玉砕してまもなくのこと。台所で火をおこしていると、突然、アメリカ人らしい日本語で、サイパン島の日本軍は全滅した、これ以上の抵抗は無駄であるから、はやく降伏するように、といった意味の呼びかけが、ラジオからながれてきました。

戦況については、いつも威勢のよいことばかりの大本営発表にもかかわらず、巷では（我がほう）の劣勢がひそかに囁かれていましたから、別に寝耳に水ではなかったのですが、日本の通常の放送を中断してまで割り込んでくる強力な電波の存在に、敵がすぐそこにいることをはじめて肌身に感じて、呆然となったことを、昨日のように思い出します。

それからまもなく、こんな小さな海辺の町にも空襲がありました。家の外に出ていたとき、突然、艦

載機とおぼしい飛行機から攻撃をうけました。ちょうどすぐそばに、私が掘った形ばかりの防空壕がありましたので、そのなかに子どもといっしょに駆け込みました。敵機がそのまゝ行ってしまったので、こんどは母屋に逃げ込みました。何でもこんな家数も少ないところをやってきたのかわかりませんが、近くに学校があつたので、兵舎と間違えたのかも知れませんが、

戦争中には、またこんなこともありました。

私の家の近くに昔からの海軍の演習地があつて、若い海軍さんが、毎年何週間かは村の農家に合宿してそこで訓練を受けていたのです。戦争の初期のころです、うちの敷地が割合広くて、庭の奥に母屋を建てるとき土盛りをしたためにできた、大きな穴があいていました。兵隊さんの何人かが、演習をさぼつて、ときどき、そこに隠れて休憩していききました。結構楽しそうでした。そんなときに、宿舎に帰つてから、自分たちの食事の残りだったのでしよう。おはぎを持ってきて「坊やといっしょに食べてください」と置いていったことがありました。おはぎといつても、もち米のご飯と餡と別々になっていましたが、そのころはご飯でさえ食べられなかったのですから、たいへんなご馳走でした。

敗戦の色濃くなる中で

それから一、二年経つたでしょうか。私たち国民は、食糧の配給もいよいよ細り、本当に心細い限りでした。そこですこしでも足しになるようにと、痩せた砂地の庭を見よう見まねで耕して、じゃがいもとか、さつまいも、かぼちゃなどをつくりました。さつまいもは土地にあっているらしく、よく獲れましたので、保存用に乾燥芋を作ったものでした。

ある日のこと、二、三人の兵隊さんが入って来て「その乾燥芋をくださいませんか」といいます。私は驚いて、「実は、これは、私と子ども大切な食糧なんです。だからあげられません。ごめんなさいね」というと、さすがに気の毒そうな顔をして「上官に言われたので……」というのです。門の外を見ると、なるほどその人らしいのが、立っていました。

そのとき私は「ああ、もう日本は負ける」と思いました。何ともいえない悲痛な気持ちでした。つい先頃は、おはぎを持ってきてくれた兵隊さん（無論同じひとではありませんが）、しかもその上官が、こんな僅かばかりの乾し芋をねだるのです。

今、昭和史の年表を繰ってみると、昭和一七（一九四二）年の半ば頃から、あらゆる戦線で日本軍は敗退を続け、急速に戦力を喪失していました。それでも辻堂のような当時の片田舎に住んでいた私は、そうした真相など知るよしもなかったのです。弟の一人は、学業半ばで学徒出陣（一九四三年）、もうひとりは、理科系だったので、しばらく猶予されていました。これも、猶予停止となり、覚悟を決めていましたが、幸運にも、その前に戦争が終わりました。

昭和一九（一九四四）年には、サイパン島全滅、学童集団疎開、国民総決起の竹槍訓練、女子挺身隊、そして神風特攻隊の出撃、東京をはじめ、日本本土への空襲など、まさに断末魔のときが迫っていました。あとで知ったのですが、その年、東海地方に大地震があつたのに、私は知りませんでした。戦時下のこと、公表されなかったようです。

昭和二〇年、私は子どもを連れて妹の家族とともに、長野県蓼科の親湯に疎開しました。なんと辻堂が、米軍の日本本土上陸作戦の予定地点となつていろいろらしいことを、私の父がどこかで聞いてきて、大

心配をしてくれて、自分の家族として当時勤めていた会社の家族の疎開寮に入れるように配慮してくれたのでした。私は夫が外地に行つたまま、もうほとんど音信もなくなっていましたので、父の温情が身に沁みました。地方に疎開する人、買い出しに行く人などで、ごつた返す汽車に乗って、妹の子ども入れて赤ん坊一人、幼子二人を抱え、無我夢中の旅でした。空襲警報にも脅かされました。

あれは、確かその年の二月の頃だったと思います。疎開寮は、いまの蓼科からは考えられないような山奥の辺鄙なところでしたが、寒さが厳しくて五月までは入れないので、それまで麓の町、茅野で待機していました。ところで、あとで知つたのですが、そのあたりは「やまうら」といって、平常でも作物があまりとれない痩せた土地柄なのだそうでした。あの敗戦の年はわけても天候不順で、ひどい不作でした。秋になつて田圃の畦道を歩きながら稲穂をそつとこいでみると、ほとんど実がはいっていないのです。背筋が凍る思いをしたことを、今でもよく覚えています。

《疎開者》の苦悩

今はそんなことはないでしょうが、その頃、長野県人は、〈よそ者嫌い〉で通っていました。そこへ東京の方からどつと、四、五〇人がはいってきて、何の働きをするでもなく、ただ世話をかけるばかりか、なかにはいろいろ不平不満を言ったり、注文をつけるひとがいたりして、よけい反感を買つたのかも知れません。私たち疎開者は、最後まで招かれざる客でした。土地の人びとの生活が貧しいのですから、文句がいたえた義理ではありませんが、察から支給される食事は、食事とは言えない、ひどいものでした。辻堂にいたときには、知り合いの農家から、野菜や卵など少し分けて貰つたり、自分で耕して不足分を

補うこともできたのですが、寮生活となると、耕す土地もなく、山に入って山菜を採ろうにも、どれが食用で、何処に行けば何が摘めるのか見当もつかない。われながら不甲斐ない限りでした。

それでも何とかしなければならぬので、山を下って、知らない農家に寄っては、何でもいい、食用になるものをわけて貰いました。私が帰るのを待ちわびている子どもたちが、廊下を走ってきて「きょうは何かあった？」と聞く声がいじらしく、今でも聞こえてきそうです。そんなにしても、みな栄養失調になりました。殊に子どもたちが……。

私も妹もいつの間にか生理もなくなっていました、それを心配する余裕すらありませんでした。

ある日、食事中に三歳の私の息子が、脳貧血を起こして、すーっと後ろに倒れました。私の頭のなかで血の気が失せました。「ああ、どうしよう」

そのとき、山を降りる途中に牧場があつたのを思い出しました。「そうだ、あそこから、乳牛を一頭借りるように頼んでみよう」

ちやうど、折しも良く本社の社長さんが、様子を見にこられたので、そのことを直訴しました。それで、翌日から寮内の子どもたちは、毎日牛乳を飲めるようになり、ひと息つくことができました。

この年（昭和二〇年）三月九日の東京大空襲からはじまって日本中のめばしい都市は、連日の激しい空襲の結果、灰燼と帰してしまいました。ラジオでそのニュースを聞くたびにみんなどれほど心配したことが。東京大空襲のときは、私たちは、まだ蓼科に上っていなかったもので、茅野の駅に行つて列車が着くたびに、だれかれとなく声をかけて、どこそこの辺りの様子はどうか、などと聞きまわったものでした。

親湯に移ってから、B29爆撃機が、空高く飛んでいくのを何回か見ましたが、迎撃する味方の飛行機は一度も見られませんでした。またどこかを爆撃に行くのだと思いつながら虚脱感のほか何もありませんでした。また、ドォーン、ドォーンという遠雷のような響きが、しばらく続いたことがありました。だれかが、あれは、敵の艦砲射撃の音がここまで聞こえてくるのだ、と教えてくれました。近くの鉄山では、おそらく強制連行されてきた、朝鮮の人びとが働かされていたのですが、残雪のうえに、「独立の日に近いぞ」といったメッセージが書かれていたと知らせてくれたひとがいました。きっと彼らのなかの誰かが、苦役に苦しむ同胞を励ますために、日本人の目を盗んで書いたものだったのでしょう。私たちはそれを聞いて怯えるばかりでした。

子とともに〈自決〉を促される

そんなある日、寮長が、「敵が上陸する日が近いかも知れない。その時、自分たちは自決する、皆さんは、逃げるだけ逃げて、最後は子どもさんを殺して自決する覚悟をしていてください」と言われました。それを聞いて私は「自分の手でこの子を殺すことなど絶対できない！」と心のなかで激しく叫びました。

新型爆弾（原子爆弾）が広島、長崎に投下されたというニュース、終戦の詔勅を聞いたのも、この夢科でのことでした。

八月一五日以後、間もなくアメリカ軍人が数名、なぜかこの寮にやってきたことがあります。妹は、たまたま廊下ですれ違ったのですが、我にもなくすさまじいまでの憎しみが煮えくり返るのを感じて、

「ああ、私は日本人なんだ」と心底思ったそうです。

新型爆弾については、しばらく何もわかりませんでした。私は原子爆弾なるものについて当時ほとんど何も知らなかったのです。「やっと戦争が終わったのだ」とそればかり。

戦後の荒廃の中で知った〈情報〉の意味

米軍の占領がどのようなものか、見極めがつかないから暫くはそちらにるように、と言われて、一〇月まで待つて辻堂に戻りましたが、戦後の荒廃と混乱をただ夢中で受け止めて、なんとか必死で生き延びてきたのだと言えませんか。ほとんど何も覚えていないのです。辻堂の家も母屋は東京で焼け出された親戚たちの住まいとなっていて、私と子どもは、留守番小屋に落ち着きました。

食糧難はいいかわらずでしたが、東京などでは闇市が立って、そこに行けば何でもあると聞きました。ただ、不思議なのは、敗戦であつたにも拘わらず、それ故の絶望とか脱力感、前途の不安などよりも、なんとも凄まじいまでのエネルギーの奔流が、日本中を覆っているのが、ピンピンと肌に感じられていたことです。理屈もへつたくれもない、なにしろ解放されたのだと。これは、その時分私の心いっぱい占めていた思いでしたから、そうした風潮によけい敏感になつていたのでしよう。

そのころ、ラジオの番組で、たしか〈真相箱〉というのがあり、戦争の真相というのが、次つぎと明からさまにされていきました。そんな中で、私たちは、大本営発表のウソツパチ、沖縄戦のこと、広島、長崎のことなどなどを知るようになったのです。むろん当時は米軍の占領下ですから、それなりの政治的工作がされていたのを勘定に入れても、本当のことを知る痛快さを、はじめて味わったといつてよい

でしょう。その真実がたとえどのように酷い無茶苦茶なものであっても。そして私は、私自身のナマの体験を通して、権力に対するほとんど絶対的な不信感を抱くようになりました。このとき以来さまざまな出来事に会いましたが、この不信感は今日まで残り続けています。

夫の帰還と女性参政権

敗戦の翌年、夫がようやく仏印から帰ってきました。彼は後に「過去を振り返ってみると高校時代の三か年とハノイ時代の五か年が強烈に印象に残っている。在留邦人はみな、現地での生活を楽しんでいたのではなかったか」と当時を懐かしんでいます。日本の戦時中の暮らしとはなんという違いでしょう。帰り着いた家は、留守番小屋（といつてもちゃんと屋根があれば、畳も敷いてある）、出かけていた時にはいなかった子どもがいる、翌年に次男、またその翌年には三男と矢つぎ早に生まれて、敗戦直後の混乱時代に生活の激変に適応するのが大変だったと思いますが、私もその落差のなかで、あらためて結婚生活を築いていくのは容易なことではありませんでした。そうしたなか、日本国憲法と、教育基本法が、公布、施行されました（昭和二年）。わたしたち女も選挙権を手に入れたのです。

平和憲法に歓喜の涙

日本国憲法は平和憲法です。そのことが、どれほど嬉しかったか。当時まわりにいた人びとがみんなどれほど喜んだか、わたしはよく覚えています。あの暗い軍国主義の時代。いつ果てるとも知れない戦

争の時代。当たり前のことがうつかり口にもできない時代。「自由」も「平和」も禁句の時代。召集令状がくれば、何をおいても応召しなければならぬ。戦死してもお国のためだからと笑って受け入れなくてはいけない。どんな理不尽でも「お国のため」と言われれば、黙って従うほかはない。国民の生殺与奪の権は完全に国家の手に握られていたのです。そういう私たちが、平和憲法にもろ手を挙げて賛成したのは当然至極のことでした。

あの一五年にわたる戦争を生き延びることができた人間が、前途に希望がもてたのは、「日本国憲法」制定のおかげです。特に女性にとつては!! 戦争を政治の手段と心得ている政治家たちが、この憲法、特に第九条をいずれはなきものにしようと、当初から考えていたらしいとは、後になってわかったことです。あの時分、よく子どもたちから聞かれました。「どうして大人はこんなむちゃくちゃな戦争を始めたの? 何で途中でやめなかったの?」

言われるまでもなく私だって思いは同じでした。でも当時、女には公的な発言権はなかったのです。「これからは違ふぞ。私たちは時に応じて堂々と発言する。もうこんな馬鹿なことは、二度と起こさせない」と心に誓いました。

歩き始めた主婦たち

戦争後の社会的な活動などと言えば、大げさに聞こえるかも知れませんが、私の場合、それは、一九四八年、長男が小学校に入学して、従来の父兄会に代わるPTAという新しい組織体の一員となったところから始まりました。国民の生活は、まだ戦後の荒廃から立ち直ってはいませんが、新しい憲法

と教育基本法のもとで、親たちは子どもの教育の将来に明るい希望をもっていました。加えて、初代の会長を買って出られた方が、ガダルカナル島生き残りの元海軍大佐で、たいへん開明的な考えの持ち主でした。新憲法や教育基本法の精神をよく理解してPTAの基礎を固め、方向性をしっかり定められたのは、学校（藤沢市立辻堂小学校）にとって幸運でした。先生と父兄の間柄もよく、自由で伸びやかな雰囲気がありました。その頃の物情騒然とした世情を考えると、ちよつと不思議な気持ちさえします。

〈PTA〉のなかで育つ

PTA活動のなかで忘れられないのは、母親たちの大活躍で学区に新しい中学校ができたことです。実はその頃この地区では、毎年増えていく学童の受け皿となる中学校がありませんでした。そのため生徒たちは隣の学区の中学校に、遠い道のりを通っていたのです。PTAは市当局に対してたびたび要望をだすのですが、なぜか、いつもはつきりしない返事ばかりでした。そのうち、とんでもないニュースが入ってきました。かねて市側が中学校の建設予定地として匂わせていた土地が、ある会社との間で売買交渉が進行中ということです。その土地以外には近辺に適当な土地はありません。

私たちは驚いて教育長のところに飛んでいき、事の真相を確かめました。すると交渉はまだ最終段階ではないらしいことがわかりました。そこで一歩進めて、辻堂地区に中学校を建てる喫緊性について教育長自身の意見をたどしました。なんと、私たちと同意見なのです。「でも正直なところ、自分たちは理事者たちには弱くて」と本音を言われました。

「わかりました。では私たちは署名運動を始めますが、よろしいですか」とたずねると、「どうぞ、

やってください」という返事。そこで、すぐに行動に移りました。私たちは、たまたま成人教育委員会のメンバーたち二〇数人でしたが、まずこの話をPTA会長（初代の方ではない）のところに持って行きました。ところが「今頃そんなことを言い出して無理ですよ。今年度の予算は五月の市議会で決定済みだからね」と相手にしてもらえませんでした。それでも私たちは諦めませんでした。たしか夏休み直前の炎天下、みんなで手分けして走り回って、たちまち二七〇〇名の署名が集まりました。「これを持って九月の市議会に請願しましょう。そのためには、地元の市議の賛同が必要」というわけで、これもみんなの汗だくの努力で諒解を取りつけることができました。それでもまだ、難問山積でした。

そのひとつは、お隣の鶴洋小学校の学区の一部が新設の中学校の学区に編入されることになるので、そちらのPTAから猛反対を受けたことです。というのは、鶴洋小の卒業生は、当時、神奈川県下一の優秀校と謳われていた鶴沼中学校に自動的に入学できたからです。それが、まだ基礎も固まらない、海のものとも山のものともわからない新設校に行かされるなんてとんでもない、というわけです。それは親として当然の不満であり、心配でもありました。

鶴洋小学校PTAの不安心配は、辻堂小の私たちも、一部共有していたものです。それでも藤沢市が東京の衛星都市として発展を続ける以上は、これはどうしても避けて通れない問題として一緒に考えていただくようにと願い、少しずつ話を深めていきました。

中学校の建設予定地には戦時中から通信学校と呼ばれていた施設がそのまま残っていました。「さし当たってはその校舎を使う。しかし次年度には市当局に新校舎の建設を要請する。今この機会を逃したら、当分中学校の新設は諦めなくてはならない。そうなれば、毎年増える一方の学童たちはどうなるのか。それに、教育は本来、校舎によって決まるものではないはず。こうなったら、新しい学校にはぜひとも

立派な教育者、優秀な先生方にきていただくよう理事者側に強く要望しましょう」というわけで、鶴洋小学校側からも、ようやく諒解を取ることができました。

母親たちが心をつにして要求することで、「とても実現できないだろう」と思われていたことも、一つひとつ実現していく。その喜びのなかで〈女が発言する。行動する〉という実績が重ねられ、母も子も幸せになることを体験できるようになったのも、戦後の大きな〈事件〉でした。

この年はちょうど秋に市長選挙を控えていましたので、候補者たちから校舎建設や敷地の問題に関するアンケートも取りました。とにかくみんな結束し目的を達成するために、あらゆる知恵と情熱を注いだのです。うれしいことに、新市長は公約どおり、校舎、しかもコンクリート建ての校舎を造るべく、起債を獲得してくれました。市議会で私たちの請願が受理されたとき、教育長が「お母さんがたの熱意に脱帽します」と頭を下げられました。こうして藤沢市立湘洋中学校は、翌一九五六年四月、めでたく開校の日を迎えたのです。全国的にも珍しいケースとして新聞にも大きく報道されました。あの時の私たちみんなの喜びがどんなものだったか、いま思い返しても胸が躍ります。

藤沢市立湘洋中学校は、以上のような経緯から初年度は一年生だけの変則的なスタートとなりましたが、先生方の陣容は私たちの希望したとおり、すばらしいものでした。校長は鶴沼中学校から移ってこられた名校長の声高かった加藤寿雄先生。そして粒よりの先生方が熱意をこめて指導され、生徒も父母も意欲的に応えたので、最初の一年生が高校進学を迎えたとき、なんと、その頃神奈川県で行われていたアチーブメント・テストで、県下第一位の成績をおさめたのでした。そして新築のピカピカの校舎から

藤沢市立湘洋中学校第一回卒業生は誇らかに巣立っていきました。

四〇年の星霜を隔ててあの日々を振り返るとき、ノスタルジックな感慨とともに、いま、学校やPTAが置かれている環境が思い合わされて、胸のうちに響く不穏なざわめきを扱いかねています。もしも機会があったらこの四〇年の変遷について、親たち、教育者、行政、その他専門の学者、研究者も交えて一緒に考えてみたいところです。

原水禁活動にかかわる

話が前後しますが、PTA活動のなかで、もう一つ印象深い出来事がありました。それは、一九五四年、アメリカが水素爆弾の実験を行なった際、マーシャル群島ビキニ環礁の付近でマグロ漁船第五福竜丸が《死の灰》をかぶり、乗組員二三人が原爆症に罹るなかで久保山愛吉さんが亡くなるという衝撃的な事件が発生。まもなくその海域で獲れたマグロが放射能で汚染されていることがわかり、マグロは全面的に発売禁止となっていました。

その禁止措置がいつまで続くか見通しもつかないと知った東京杉並区の魚屋さんのおかみさんが怒り心頭、周囲に呼びかけて原水爆禁止署名運動を始めました。この運動は全国的な反響を呼び起こし、日本国内で二〇〇万人以上の署名が集まったのです。辻堂小学校のPTAは、その運動の全国協議会代表の安井郁氏をお招きして、この問題について勉強しました。その結果、署名活動に参加した人が多かったですとおぼえています。

原子力兵器の無条件禁止を求める運動は、一九五〇年スウェーデンのストックホルム・アピールが始

まりだと思いますが、このとき日本で集めた分もあわせて世界中で六億七〇〇〇万も集まった署名が、一九五五年の広島での第一回原水爆禁止世界大会開催の原動力となったのでした。

地域活動の中で育つ

私は一九五〇年ころ、婦人国際平和自由連盟(WILPF=Women's International League For Peace And Freedom 日本支部)に入会して、日本国憲法や日米安保条約その他、激動を続ける当時の社会に次つぎ生起してくる様々な問題について皆と一緒に勉強していました。それと、会としてこれから何をするか企画立案する作業にも加わっていました。

そのとき閃いたことの 하나가、「青年たちのために交流の場を作ろう」というアイデアでした。私はまず自分が住む辻堂在住の会員に相談すると、すぐその家の大学生のご長女に伝わり、彼女の尽力で、たちまち数人の若い人たちが集まりました。私たちとしては、新生日本の担い手となる若人たちが自由に明るい未来を構想し創造するお手伝いをしよう、というのが主願だけれど、まずは集まった若い人たちの意見に耳を傾け一緒に考えようと決めました。すると、まるで溪流がサラサラと流れくだるように、わけなく次回の集まりについて相談がまとまりました。「若い人つてすごいな、すばらしいな」——それが私の第一印象でした。今考えてみると、私もそのころ三二、三歳なので若かったんですね。みんなが新しい時代を生きるよろこびと活力にあふれていたのです。

二回目からは、友だちを誘ってきてくれたので人数も増え、さあ、これから何をしようかということになりました。いろいろな名案がとびだしました。たとえば、中に一人、ダンス教師の免状をもってい

る変わり種がいて、みんなにダンスを教えしてくれるというのです。「ほんとか」と言うとは本気なので、幼稚園が空いている時間を借りて何回かレッスンを受けているうちに、みんな驚くほどの短時間で、しかも無料で、初歩のステップを覚えて踊れるようになりました。

有名人とも膝つきあわせて語り合う

趣味でジャズ音楽に精^こしいひとがいました。彼はレコードを持ってきて皆に解説してくれました。こんな風に仲間どうしでいろいろ話し合ったり、啓発しあったりしているうちに「外部の専門家の話も聴いてみたいな」ということになりました。そうは言ってもみな一介の学生にすぎません。「いいけど、じゃあどうする」「ジャズなら鶴沼に河野隆二がいるよ。売れっ子だからきてもらえるかどうか知らない。でも頼んでみようか」といつて頼みにゆくと、気軽にきてくれました。

これに勇気を得て、みんな勝手に会ってみたい人の名を言い合う。「じゃあ、この人」と白羽の矢を立てて頼みにゆくと、たまたま伝手があるひと、まったくないひと、ほとんどが本当に快く来てくれたものでした。みな錚々たるその道の著名人たちでした。名前を言えば、記憶しておられる方も多いに違いない、福田恒存、中村光夫、中河与一、鹿島孝二、植村鷹千代、三津田健などなど。それも八畳ばかりのせまい部屋で、若い連中とひざ突き合せての忌憚のない議論を戦わせ、時間の制限もなく（もつとも当時東海道線の終電は割合早かったのですが）よくも付き合ってくれたものでした。謝礼といえばリプトン紅茶の缶ひとつくらい。前総理大臣の片山哲さんは、お弁当持ちでやってこられました。そのほかにもテニスをやったり、一緒に海に行ったり、また当時、私の夫が友人たちと共有していた家が箱

根山中にあつたのを貸してもらつて夜つびておしゃべりを楽しんだりもしました。

集まる人は大体一〇人―二〇人、男女半々だったと思います。女性たちは皆、辻堂在住の人たちでしたが、夜遅くなることもありました。私は、男性たちにならずエスコートして無事送り届けるようにと厳しく言っていました。女性たちの親御さんが、よくもこの会を信頼してくださったものと、今にして思います。男性たちさえあまり遅い時間なので、自転車で帰宅途中、不審尋問にあつたなどと、後になつて聞きました。

人と人とがふれあいつつ育つた戦後

こう思い返してみると、一見、なんだか遊んでばかりいて、貴重な時間を空費したのでは、と思われるかも知れませんが、実はそうではない。当時メンバーだった齊藤 栄氏が著書のなかで「こうした場所での刺激というのは、たとえ、わずかな時間の接触であつても……いや、それだからこそ、将来、長い期間にわたつて一人の人間を励まし、勇気づけ、燃え立たせるものである」といみじくも書いておられます。一九五〇―五三年といえ、戦後の日本の方向を決定づける出来事が、社会のあらゆる面で踵を接して踞れた、重苦しい、不穏な時期だった。それにもかかわらずその一面では、かくも伸びやかな、愉快な時間を過ごせたことの意味を、今になつて噛みしめています。

誰もが豊かな資質をもつた若者たちでした。中には、惜しまれて夭折した人びともいたけれども、戦火に身をさらすことなく、殺し殺されることもなく、それぞれ自ら納得のいく人生を澁刺と生きてこられたと、これは、いまだに年一回ひられる〈みどり会〉（この会の名称）の交換会に参加するたびの、

私の感想です。

世界二十数か国の人と、膝つき合わせて語りあつて

WILPF（婦人国際平和自由連盟）は、一九六二年アメリカ合衆国アシロマで世界大会を開催しました。その会合に日本支部から代表の一人として参加したことが、私にとって大きな転換点となりました。世界の二〇数か国から集まった女性たちから、各国の情勢、またそのなかでの活動報告を直接聞くことができたのは、実に刺激的でした。なにもかも新鮮で、面白くて、ハード・スケジュールも何のその、寸暇を惜しんで、あらゆることを貪欲に掻きこんだといつてよいでしょう。日本の一般市民は、あの言語に絶する軍国主義、戦争、敗戦を経験して、平和のありがたみが芯からわかつているはずなのに、平和を維持し発展させるために自ら何をしているかを反省させられました。私のペーパーは、六〇年安保闘争に関わるものでしたが、その報告を聞いた諸外国の人びとから、「私たちは日本人が、アメリカの言いなりになるただのイエス・マンではないことを知って、見直しました」と言われ、我が意を得たと思うと同時に、各国の市民同士が、普段から交流しあい、意思を確かめ合うことの必要を痛感しました。六〇年安保闘争当時、岸首相は、「安保闘争は日本の国際的信用を大いに傷つけた」と広言して憚らなかつたのです。もしも市民間のコミュニケーションがなければ、世論は岸首相の意のまま操られ、平和を望む私たちの真意が正しく外国に伝わらないままにことが推移していく恐れをまさまさと感じました。〈国家が手に入れた安全と保障と（私たちが望む平和）とは、まるで異なるものなのです。それ以後、わたしは、平和の同志である外国、特にアメリカ人と、努めて情報を交換するように心がけました。そ

れにかかわるエピソードを一つ――。

一九六四年のトンキン湾事件以来、アメリカでも日本でも、反戦運動が高まりました。それでも日本政府は、当時のジョンソン大統領のベトナム戦争政策を支持しつづけていました。一九六七年佐藤首相がアメリカ訪問に出かけたとき、私はアメリカの友達十数人に手紙を書き、「佐藤首相がベトナム問題についてどんな発言をするか注目していてほしい」と頼みました。すると数人から、つぎのような趣旨の手紙がとどきました。

「日ごろの私たちの交信から知っている日本の一般市民の感情とあまりに食い違った佐藤首相の発言にはびっくりした。だから、日本大使館気付で抗議の手紙を送った」と。(佐藤氏は、日本人はアメリカのベトナム戦争に理解を示している、とでも言ったものと思えます。)日本大使館には、「日本の信頼する友人の手紙によれば、多くの日本人はジョンソンのベトナム政策に反対しているという。私たちは貴下(首相)の一方的な《支持》の声を聞いて失望している。どうかもっと正直に、日本国民の意見を伝えてほしい」といった趣旨の手紙が佐藤首相宛に何通か届いたはずで。

アメリカの町の人びとと親しむ

アシロマの会議が終わったあと、外国からの参加者はカリフォルニア州のWILPFの支部からそれぞれ数日間の招待を受けました。

私はサンノゼの支部のフランセス・ハートシュティンさんのところに一週間滞在させてもらいました。ここでアメリカのごく普通のコミュニティでの市民活動の実態にふれたことが、会議での収穫と相ま

って私のそれ以後の生き方を決定づけたといつていいかと思います。

サンノゼは、たとえば、バークレー市のように特別平和指向の町ではありません。それでもメンバーたちの間には、自分のできる範囲で平和のために尽くそうとする空気がみなぎっていました。私たちのような外国のお客を手分けして泊める。ミーティングの場の設定はもちろん、終わった後は、夫君も一緒に自宅で気の置けないパーティーを開く。観光スポットへの案内、車での送り迎え、ポスター作り、電話連絡、タイプ打ち（そのころワープロもパソコンもない時代でした）等々。

サンノゼといえは、いまでは、シリコンバレーの中心都市ですが、その頃は果樹園に囲まれたみどり豊かな環境でした。フランキーとご伴侶のジャドは、ここで私たちの生涯の友たち、親友となりました。

〈平和学会 創設へ〉

〈WILPF〉の、この大会では、たいへん重要な提案がありました。それは、「いま世界的な規模で、PEACE RESEARCH（平和研究）」という新しい学際的な研究の場が樹立されようとしているが、戦争のない世界はどうすれば実現できるのか。平和は従来、科学的な研究には馴染まないとされてきたけれども、原爆はじめ究極的な兵器が続く登場する時代となつて、学問は、もはやこの問いを避けて通れなくなっている。〈WILPF〉としては、この気運の高まりを側面から全力的に応援したい。すでにいくつかの国の支部では、その方向で活動を始めているが、日本ではまだのようだ。しかし原爆の被災国として日本にはぜひ参加してほしい。帰国されたならば、早急に検討をお願いしたい」という提案です。その責任を私が負うことになってしまいました。まったく思いもかけないハプニングでした

が、ほかに引受け手がいなかったものでやむを得ませんでした。これほど重大な提案を拒むことなど考えられませんでした。

この案の提案者だったエリーズ・ポールディングが、翌年夫君ケネスとともにICUに来られるというので、それまでに何とか目鼻をつけなければ、と決心しました。私は日本の学界にはそれまで縁もゆかりもありませんでしたが、幸運にも一九六六年の秋、《日本平和研究懇談会》という当時少壮の学者がたの研究グループを作ることができました。そして成り行き上、そこでセクレタリーとしてお手伝いすることになったのです。

この年の夏、オランダ・グロニンゲンで国際平和研究学会の創立総会が開かれ、日本からは川田侃（東大）、宗像巖（上智大）の両教授が出席されました。なおこの《平和研究懇談会》が母体の一つになって、一九七三年に《日本平和学会》が創立されました。その間の経緯については略しますけれど、私が平和教育部門で責任者となりましたので、必要と考えることだけ少し触れさせていただきます。

「平和研究」という、新しい学問分野は、学際的なアプローチが前提となりますが、そのなかで、特に六〇年代後半から七〇年代にかけて構造的暴力の問題が大きくクローズアップされるようになりました。その頃、第三世界、発展途上国の参加者から突きつけられた問題です。それに西独や北欧の若い研究者が呼応しました。「戦争がなければ平和ですってー」とんでもない。富める国々が築いた支配的構造のもとで、第三世界は、戦争の有無に関わらず、あらゆる面で、平和とはほど遠い、悲惨な、非人間的な窮状におとしめられています。この平和不在状況こそ戦争の対極にあるもの、この現状を変革するための平和研究でなければナンセンスではないか」「わたしたちの貧窮こそがあなた方の豊かさや平和の条件になっ

ているのですよ」という糾弾です。

この批判に応えるために、「平和研究は戦争（紛争）の原因と平和の条件の科学的探求が本旨であつて、平和運動とは一線を画する」という、発足時の建前から大きな軌道修正を余儀なくされました。

指摘された「ピースレスネス」と、この状況を再生産し続ける不良開発（マルデベロプメント）に、学問としてどう対決し、なにを貢献できるのか。討論が重ねられるなかで、「IPRA」は、平和研究（平和の科学的探求）は、平和教育と平和運動（実践活動）と、常に相補的な緊張関係のなかで進めるべきもの」との一応の理解に到達。その意味で社会科学としてギリギリの学問的営為であることを思い知らされたのでした。

このような事情があつて「IPRA」のなかに「PEC」という平和教育委員会が設けられました。私は、「日本平和学会」で平和教育部会の責任者だったので、委員の一人に選出されました。

グローバルな視点での平和研究を——まず「平和のキット」づくりから

こういう国際の場で、こんなチャレンジを受けて、グローバルな視点にたつ平和教育を考える、——これは大変なことです。私たちになにができるか。

その頃、欧米諸国で、いろいろなテーマのもとに平和教育のキット作りが試みられていました。「PEC」も「世界のほうぼうの教室で気軽に使つて貰えるキットを作つてみてはどうだろう」と提案してみました。

「世界意識（ワールドマインデッドネス）を培つことを中心に据えたキット。内容は、子どもたちの絵

とか折紙や小石やビーズを使った作品とか、美しいカード、写真、漫画、等々で、はじめは好奇心から手にとつて見ているうちに、だんだん興味がわいてきて、もつと知りたくなる——そんなキットを、(P E C)の意向を汲む各国の教師何人かに実験的に使つてもらつて、コメントをお願いするのです。内容は出し入れ自由にして、使われた場で、よりふさわしいものに作り変えてもらつて、そのコピーを送り返して貰う——こんなフィードバックを辛抱強く繰り返しているうちに、世界のほうぼうの教室が、地球規模の楽しい教材づくりに協力するようになるかもしれない、と。

こんな夢を持つて、私は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの伝手を頼つて、資料を集め始めました。個々の資料として優れたものがいっぱい届いたのですが、いざこれらを、前記の条件に見合うようにまとめるとなると、とても難しいことがわかりました。言葉の問題とか交信の手段(今ならパソコンが使えますが)、双方の情報不足など、さまざまな障害を解決できないで、結局、うまくいかなかったのです。考えが甘かったといわれても仕方がないのですけれど……。

アイデアは悪くなくとも時が熟していなかったのです。なにより、私たち当事者自身の「世界意識」が未熟であることを思い知らされました。もつとも、あれから三〇年以上たっているのに、いま世界の政治家や指導的位置にある人びとの「ワールドマインドスネス」はどうなのだろうと思うと、日暮れて道遠しの感が深まるばかりです。

なにはともあれ、キット作成のアイデアは残り、まる三年の紆余曲折のあと、みんなの協力で、やつと第一号「平和教育者のためのキット」ができあがりました。ただしそれは、子どもと教師と研究者を結ぶ素朴な手づくりの感触をもった教材モデルとは、およそかけ離れた、アカデミックな欧米色の濃いものとなりました。

こういうものを作るのであれば、実は、むしろやさしいのです。このキットづくりの経験から、私は、「グローバルな場で平和研究と平和教育と平和運動があい携えてなにかをつくるのは真に難事業だ」と身にしみました。

「原爆を投下した国はこの国か」知らない子が八〇％

日本の平和教育はヒロシマから始まったと言っているでしょう。

一九六八年八月六日広島の小・中学校の先生がたが、子どもたちの原爆問題に対する意識調査を行ないました。その結果は危惧していた以上に衝撃的なものでした。原爆が昭和二〇年八月六日午前八時一五分、広島に投下されたことも、投下したのがどの国だったのかもはっきりしない子どもが八〇％もいたのです。原爆被災体験を伝える教育をどうしても進めなければならぬ、と、被爆教師の方がたが先頭に立って、反戦反原爆の平和教育運動が起こされました。先生がたの手によって副教材「ひろしま」が作成され、これを活用して平和教育運動が全国的、さらに全国的にひろがりました。

この運動を推進し、より深めるために、一九七三年に広島平和教育研究所が設立され、毎年平和教育全国シンポジウムが開催されるようになりました。

被爆者として戦争の惨禍と不毛とを一身に体験された先生がたの平和教育実践の記録は、反原爆、反戦の教育として一つの頂点を極めたものです。また、一貫して核兵器の恐ろしい破壊力と非人間性を訴え、戦争を国際紛争解決のための手段と考える誤りを、世界に警告してやまないヒロシマの平和教育はグローバルな平和教育にとって計り知れない重みをもっています。私は（P.E.C.）での作業を通して

このことを再確認させられました。平和不在状況のなかの一環としてのみ戦争を考えるだけでは戦争の本質、その恐るべき実態には到底迫れないのですから。子どもたちにも戦争と平和についてじっくりと考えてもらわなければならないのは確かです。

グローバルな連帯があつてこそ〈平和〉は可能に

一方、日本の平和教育もいくつか問題を抱えていました。

海外との交流を欠いているために折角のすぐれた成果が国外には知られていない。逆に海外の平和教育の動向に疎いために、前述の平和不在状況への対応ができていない。国内でも同和教育、環境公害教育、開発教育などの分野で注目される報告が出ているのに、それらは、平和教育とは別ものと考えられていました。「平和教育」とはもっぱら「反戦、反原爆教育」だったのです。これでは国際的な場で他の平和教育者と同じテーブルについても話が通じないままフラストレーションだけが残る結果になりかねません。日本の平和教育はもつと世界に開かれたものにならなければと痛切に思いました。ただ、教師でもなく、教育行政に携わったこともないアマチュアの一平和研究者として私にできることは、さしずめ、広島平和教育研究所とP.E.C.、さらに日本平和学会の平和教育部会に集まる教育者間の連携を密にする橋渡しをすることでした。なかなか気骨の折れる仕事ではありましたが、日本の平和教育の裾野を広げるうえで、多少なりともお役に立てたのであればよかったですと考えております。

平和研究は単に机上の学問に終わるものではなく、平和教育と平和行動とをつねに視野に置いた探求で無ければならないとする主張は、学者、専門家の間には異論があるところかも知れません。けれども、

私のようにごく普通の市民生活を送りながら、だれもが命を全うすることを願って、平和を追い求めている研究者にとつて、それは自明のことに思えます。ヒロシマ・長崎を見た私たちだからこそ、たとえどんなにむずかしくとも平和に貢献する学問を切望するのです。

まず足もとの〈平和運動〉を

平和行動といえば、私の場合、自分の住む藤沢市の市民運動という場が与えられていたのは、本当に幸運でした。藤沢市民の平和活動については本号でほかの方がたが執筆されるのでそちらにおまかせするのですが、一九八〇年代はじめから、市民の平和活動に理解のある若い市長、葉山峻氏を得て、市民と行政の協力で、一例をあげれば、〈平和の輪を広げる一〇〇日間実行委員会〉を立ち上げるなど、市民の自由な発想による発議から多彩な平和活動が行なわれてきました。

一九八二年に藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言を、一九九五年には藤沢市非核平和条例を、いずれも市民、労組による署名活動をはじめとする強力な運動の結果、市議会での全会一致の採決に持ち込むことに成功しました。そのほか、市長選や県議選には、勝手連を組織してそれこそみんなの創意工夫を持ち寄って、あるときは成功したり、また失敗したりもしましたが、その経験から学んだことがいっぱいありました。

一九八六年チェルノブイリ原発の重大事故のとき原発反対の意見広告を新聞に掲載しようと全国の女性に呼びかけて予想をはるかに超える大勢の賛同を得たこと、また〈むらさき露草の会〉を作つて地元で原発反対の運動を始めたのも、普段からの市民のそういうつながりがあったからこそのことでした。

この運動から（市民による食品の放射能測定をすすめる会）が生まれ、藤沢市役所の中に、放射能測定室が作られました。この放射能測定室は、今も市民の手によって市側と連携を取りながら測定を続けています。

情報を公開しないニッポン

チェルノブイリのあの重大事故を受けて、世界中で、とくにヨーロッパで、原発に対する大反対運動がおきました。放射能汚染が全世界に広がり、これが今後どれほどの被害を地球規模で生物全体に及ぼすことになるか、誰にもわからなかったからです。不安をいっそう煽り立てた原因のひとつは、ソビエトをはじめとして各国政府が国民の動揺をおそれて降下した放射能値を、正確にまた迅速に伝えようとしなかったことでした。

日本でも状況はまったく同じでした。——というより、さらにひどかったのです。ヨーロッパでは、市民の側からの強い要求があり、政府は必要なデータを発表しないわけにはいなくなるのですが、原子爆弾によってあれほどの被害を蒙っている日本市民の側からは、抗議の声ひとつ聞えて来なかったのです。

公的機関からの発表は果たして信頼できるのか、私はたまりかねて、西ドイツに住む友だちに手紙を書きました。「市民活動によって入手できた情報やそれに対応する市民の行動について教えてください」と。私からもこちらの状況を知らせ、資料なども送りました。彼女からはすぐに返事と貴重な資料が届きました。これは私ひとりの手もとに置いてはならない、ぜひ大勢にみてもらわなければと、彼女の諒

解を得て〈すすめる会〉の友達にワープロで打ってもらい、『ボンからの手紙』というパンフレットにして市民運動している仲間たちに渡ししました。みんな、よろこんで利用してくれました（一九八九年～一九九三年まで四冊発行）。内容は、〈反原発運動〉や〈ブルトニウム輸送に反対するヨーロッパの動き〉、〈環境問題〉、特にドイツから見た環境破壊のニュースなど、いま読み返してみても、当時分かちあつた危機感が、一〇年後の今日いっそうの喫緊性をもって迫ってくるのを覚えます。



日本人の知らない情報を満載した
『ボンからの手紙』

二〇〇一年から、私は社民党の国会議員阿部知子さんの地元の後援会の代表ということで働いていますが、今年一月、阿部さんと後援会のメンバー数名と一緒にベトナムに行ってきました。

阿部さんの主な目的は、ドイツ政府の援助によってベトナム各地に建てられているダイオキシンの後遺症にいまなお冒されている人びとのための厚生施設「平和村」の視察を兼ねた訪問でした。またベトナムの独立戦争の戦跡を訪ねることも予定されていました。

私はそのほかに、かつて夫が戦争中五年間を過ごした土地なので、何となくセンチメンタルジャーニーみたいな気分もあつて出かけたのですが、そのような甘い期待は到着早々吹き飛んでしまいました。考えてみれば、彼がこの地に商社マンとして駐在したのは六〇年以上も前の話です。夫がいまここに立ったとすれば、きっと浦島太郎の心境を味わったに違いありません。

そうした事情もあって、私がこの旅行で特に強烈なショックを受けた二つのことをお話しして終わりにしたいと思います。二つとも、戦争と平和に関するものです。

ひとつは、ベトナム人のガイドさんが、どうしても私たちを連れて行きたいらしい処に案内されたときのことです。その人の説明によると、そこは一九四五年に餓死した二〇〇万人のベトナム人の骨が埋葬されている特別な場所なのでした。一九四五年といえば日本軍が進駐していた頃です。夫の手紙に「当地は大飢饉に見舞われていて、路傍に飢え死んでいる人をよく見かける」と書いてあったのを思い出しました。同時に夫たちが一九七七年、仲間うちで編んだ『ハノイ・ハイフォン回想』という回想録の中で読んだ記憶もよみがえりました。

その回想録には「どこかの町の倉庫に米がぎっしり保管されている」と書いている人がいました。また、あろうことか、「その米を燃料に使った」とも……。夫は凶作による飢饉とも思っていたのでしょう。日本軍がそれらのお米を農民から略奪したために、安南人（あの頃ベトナム人のことをそう呼んでいたらしい）たちが二〇〇万人も飢え死にした、まさにその現地にいたというのに……。

夫はその回想録のなかで、自分の過去を振り返ってみると、「高校時代の三年間とハノイ時代の五年間が強烈に印象に残っている」などと書いているから、自分たちのぬくぬくとした生活と、飢えて行き倒れている人との間に何のかかわりも感じていなかったに相違ない。「見れども見ず、聞けども聞かず」とはこのことなのだ。夫たちは特別無慈悲な冷酷な人間ではないはずなのに……。

ガイドさんはまことに淡々と説明したけれど、私は心がうろたえて、どうしていいかわからなくなっていました。夢中でそこにいた墓守りみたいな女の人に、持っていた二〇ドルを渡しましたが、そ

の女の人は、「私はここを管理しているだけだから頂くわけにはいかない」というので私が当惑していると、ガイドさんがカンパ箱みたいなものをどこからか持ってきたので、その中に入れたのをおぼえています。自分でもバカみたいなことをしていると唇をかむ思いでした。同行の皆さんは、それほどの衝撃を感じなかったらしいのですが、私はたまりませんでした。

もうひとつは、私たちが南ベトナムホーチミン市からバスで数時間行ったところにあるクチというベトナム（北側のゲリラ）たちの地下要塞を訪ねたとき受けた衝撃でした。

圧倒的な戦力で侵攻してくる米軍に、ベトナム農民はどうして勝てたのか。

当時を語ってくれる元ベトナムの隊長だった老人からのていねいな説明を受けてもなかなか信じられなかったほどの、厳しいレジスタンスが続けられていたのです。

村はずれの疎林と見えるジャングルの地下に二五〇kmにもわたる壕が掘られている。そこには、厨房も会議室も医務室も縫製室も武器製造工場も、なんでも一通りはそろっている。でも電気も無い、背を伸ばして歩くこともできない、この細いトンネルのなかで、いつ何時襲撃してくるかもしれない敵に備える。誇り高いベトナムの人びとの、その鋼のような精神は、自分たちを同等の人間と見ることのできないノーテンキな人間どもの日常存在によつて鍛えぬかれたものなのでしょう。

それにしても、想像を超える仕掛けもありました。

ジャングルに侵入してきた米兵を捕らえる罠の実物をみました。それは獣を捕る罠から考えついたものらしい。大きさはいろいろだけれども、どれも罠の前左右から、米軍の落とした砲弾から作った鋭く太い釘がピッシリ突き出ている。この穴に落ち込んだら最後、身をもがけばもがくほど釘は体内深く

つき刺さるだろう。しかもその釘には毒蛇の毒が塗られていた。また、一時に数人落ちる大きな罌の底には、毒蛇が何匹も放してあったという。ここで何人死んだのだろう。その米兵士は、ことによったら、ベトコンたちよりもっとひどい環境から狩り出されて兵士になったかもしれないのに。戦争はたとえどんな高邁な精神から出たものでも許せない。私たち、どこの国の人間でも、エブリデイ・ヒューマンビリーング。(ふだん袖摺りあつて暮しているお互い同士とでも言いましょうか。)うかうかと戦争に誘い込まれないように、お互いくれぐれも氣をつけましよう、みんなから一人離れて、自分に言いかけました。

ごらんのとおり私の歩いてきた道は、私にとっては、それなりの意味を持つてはいますけれども、なにかの〈賞〉には値しない別ものとの違和感を、自分のなから追い払えないで困っています。何はともあれ、残された自分のいのちをこれからも厳しく、また適うかぎりこころ深くすごしていきたいと願っている日々でございます。

【お詫び】

この原稿は、あの授賞式当日、皆様と交わすことができた楽しいおしゃべりとは、ずいぶん違ったものになってしまいました。実は、ここに書いた中のいくつかをお話しようと思つて伺つたのですが、いつの間にか脱線してしまいましたので、誌面には〈用意していた話〉を掲載させていただきました。申し訳ございません。

地道な平和活動に光

藤沢の浮田さんに「地の塩賞」
「自然体で発言し、行動」

女性の人権問題や平和問題に地道に取り組んできた女性に贈られる「地の塩賞」に、藤沢市在住で「平和の白いリボン行動・藤沢」代表の浮田久子さん（八十九）が決まり、十三日に藤沢市江の島の県立女性センターで贈呈式

が行われた。

浮田さんはこれまでに、婦人国際平和自由連盟日本支部や日本平和学会の中心メンバーとして活躍。米中枢同時テロ後は、駅頭で平和の祈りを込めた白いリボンを配布する「平和の白いリボン行動・藤沢」を発足させるなどの平和活動に取り組んでいる。こうした活動が評価された。

浮田さんは「賞をもらうのは自分らしくない。一人の人間として、自然体で普通の言葉で発言や行動をしてきたつもりだ」と話した。

「地の塩賞」は、平和と人権、女性を主に扱う定期刊行誌「あいら」（東京都）のメンバーが中心となり、平和と女性運動に取り組んできた故・白

井博子さんを記念して一九九九年に設立された。

同賞は今回で五回目で、沖縄戦記録フィルム11フィート運動の会事務局長の中村文子さんと、

「戦争と女性への暴力」日本ネットワーク（VAVW）NETジャパンの代表だった松井やよりさんら六人が受賞している。（鈴木 昌紹）



賞状を受け取る浮田さん（右）＝藤沢市・県立女性センター

（2004年2月14日神奈川新聞朝刊）

守る平和から、紡ぐ平和に

阿部知子

沖縄から、神奈川から

約四〇年前、拡大するベトナム戦争のなか、ハノイを空爆する戦闘機が沖縄から飛び立っていった。二一世紀に入り、うち続くアメリカのアフガン、イラク攻撃の戦闘機は、神奈川の厚木基地での訓練を終え、空母に搭載されて横須賀港から戦地へと赴いていく。私たちの言うところの「平和憲法」を持つ日本から、米国の戦闘機はいつでも自在に〈敵国〉へと攻撃に討つて出ることができる。

日米地位協定に基づいて、米軍の行動の目的や行先の変更が〈事前〉に知らされたことなどないし、知ったとしても制止する意思は現在の日本政府にはこれっぽちもない。それどころか、米国による空前の大量無差別爆撃は、「サダムフセイン政権の数々の国連決議無視」を理由に正当化された。イラクで、アフガンで、空爆により多数の非戦闘員が、土地や住居、親・兄弟ばかりかその生命まで奪われようと、我が国はひたすら〈平和〉である。

リアルな問いかけの中から

そんな平和ってありだろうか？

他の人びとや他の国ぐにを存亡の危機にさらしながら、九条の意味云々を語れるとしたら、私たちはよほどノー天気、オメデタイ人びとである。

フリーカメラマン橋田さんが、我が身に代えて、その眼を何とか治療してあげたいと願ったモハマド君が来日し、手術による視力の回復を果たしたことを、私たちは心の底から喜んだ。そのモハマド君の帰る祖国が今も戦禍の中にあり、無数のモハマド君が、かの地で十分な治療も受けられないまま失明したり落命したりしていることも容易に想像がつく。それでもたった一人の子どもに對してもその傷を癒すことによつて、「希望」を持ち続けて欲しいと願う私たちがいる。

あなたたちを過酷な運命に陥れた戦争を押し止めることのできなかつた非力を詫びて、せめていのちながらえてイラクやアフガンの将来を見つめてほしいと、一人ひとりの子どもたちに伝えたい。その拠点がもしも神奈川にあつたら、私たちの平和の中身も違つてくるのではないだろうか。

米軍基地の再編に私たちの対案を

9・11以降のアメリカ力は、対テロ戦争を理由に、先制攻撃や小型の核兵器の開発を是として、単独行動主義をあらゆる場面で押し進めている。日本を含むアジア地域での米軍基地の再編も、その一環として、米軍の基地戦略にしっかりと組み込まれている。

しかし、私たちは、もうこれ以上殺戮のための基地の存続をアジアのどこにも望まないし、F18スーパーホーネットの撒き散らす爆音も、「のし」をつけて米本国にお返ししたいと思つている。

私たちの国が国としてまずやらねばならないことは、自らが容認した戦争によつて傷ついた子どもた

ちの心身を癒すためのシェルターづくりであり、治療施設の提供である。それは彼らの祖国にあることが一番である。しかし、もし祖国が戦禍のただ中で十分な治療や手を差し伸べられる状況がなければ、日本の中にそういった施設をつくり、そこを平和の実践と学習の場としても定着させていきたい。

一九六七年に設立されたドイツの平和村の活動を先例として学びつつ。

(衆議院議員)

《平和の白いリボン行動・藤沢》

鈴木圭子
深川博子

9・11の惨事から三年、残念なことに、いまだに紛争状態が続いています。だから、否応なく世界に目を向けた私たちの平和行動も、三年続けています。

藤沢では、駅頭でのアピール行動を月一回実施し、正しい情報を得るための学習会などを随時企画、または共催しています。また全国各地で独自に《白いリボン行動》が続いているところもあるようです。

黙ってられない

世界貿易センタービルに突っ込む飛行機、崩れ落ちるビル、逃げ惑う人びと……テレビ画面に繰り返される衝撃の映像は、劇場映画でもなく、テレビゲームでもなく、リアルタイムに世界中の人びとの

前にさらけ出された「アメリカの現実」でした。

そして、あたかもその時を待っていたかのような迅速さで、早ばやと「犯人」が特定され、「テロ」という言葉が恐怖をあおり立て、ブッシュ大統領は「これは戦争だ」と叫びました。

えっ、戦争？ 報復戦争？ だれも戦争なんて望まないのに。

これを戦争の口実にしてはダメだ。戦争で得るものなんて何もない。

戦争反対の市民の「声」を大きくしよう。

戦争体験世代の人たちは、緊急行動に出ました。戦争を知らない世代の若者たちも、彼らなりの方法で行動しました。やめさせることは可能だと思いました。

大メディアから一方的に流される情報は、テロ「犯人憎し」一色に近いものでしたが、私たちはインターネットなどの個人情報ツールを持つ人びとが増えていましたから、一人ひとりの市民の声をつなぐことが可能でした。



藤沢市街地で行動する一同

惨事の少し前にアメリカの知人を訪ね歩いた旅を終えたばかりの浮田さんは、知人の安否を気にかけて、直ちにかの地の情報収集を始めました。そして報復への方向が大勢だったアメリカで、平和を望む若者たちの「反戦の意思表示としての白いリボンを胸につける行動」があることを知りました。

良識ある市民を孤立させてはいけません。日本で応援しよう。行動しよう。

その思いを、ある会合で提案し、即翌日、仲間たちと、藤沢駅頭で平和アピールを実施しました。

初めて藤沢で〈平和の白いリボン〉配布に取り組んだのは、九月一八日。惨事から一週間後のことです。一時間足らずで三〇〇個の小さな白いリボンと、趣旨を書いたチラシ七〇〇枚がなくなりました。戦争への道へ進むことのないように、市民が声を出そうと訴え、反響がありました。

テロにも、報復戦争にも、絶対反対！ 平和を！！

九月二一日、アメリカ国防省、世界貿易センターなどに対する無差別テロ事件に対し、ブッシュ大統領は報復戦争を宣言しました。

私たちはテロという非人間的行為を絶対に許すことができません。と同時にアメリカによるアフガニスタンに対する報復戦争を実行させない決意をこめて、この〈平和の白いリボン〉行動に取り組みます。

この〈平和の白いリボン〉行動は、ニューヨーク市郊外、イサカのコーネル大学生たちに連帯し、日本でも呼応しようと始めました。

二〇〇一・九・一八

二回目の行動は九月二三日。今度は五〇人以上の、お互いに名前も知らない有志の皆さんが参加し、リボン一〇〇〇個、チラシ二〇〇〇枚が、またまた一時間足らずで配布終了となりました。

地域紙が記事にくれたため、アチコチから問い合わせが相次ぎ、そのほとんどが同様の行動を希望していました。近隣から参加した人びとは、自分たちの地域で独自に行動を起こしました。大げさではなく日本中に、自然発生的に、勝手に、ゲリラ的に、白いリボンの平和のうねりが広がったのです。また、この行動は私たちが白いリボンをアメリカから来た友人達に手渡す事により米国でも西海岸や南西部州をはじめ各地で少しずつ、でも確実に広がっています。

街頭行動を重ねるにしたがって参加者が膨れ上がり、アイディアが寄せられたり、問い合わせの多さに対応するために、チラシに一〇人の連絡先を書きました。ホームページも立ち上げました。

掲示板に投稿いただいた高校生からのメッセージを一つ 紹介します

投稿日・一〇月一日(月)

はじめまして。Yです。

最初にK・Sさん、連絡ありがとうございます。おかげで次の活動日時がわかり安心してます。まだまだ若輩者で、ご迷惑をおかけしますが、よろしく願います。

さて、私は制服にリボンをつけているのですが、みんなけっこう関心をもってくれて嬉しいです。

『茶髪にルーズに携帯』が高校生の三大定義になっている今、外見はちゃらんぼらんしているように見えますが、意外にみんな哲学者なんですよ(笑)

小泉首相が靖国神社参拝したことなんか、みんなで休み時間、白熱のディベートをして盛り上がりました。

今回のことも電車のなかで話していたら、前に座っていた見知らずのおばさんに

『高校生がそれだけ考えているなら、未来をたくせる』なんて言われ、恥ずかしいやら嬉しいやら。ちなみに内容はこんなかんじでした。

「だいたいさ、こちら21世紀の人間だよ？」

なのに（目には目を、歯には歯を）じゃ、紀元前一七〇〇年のバビロニア人と同レベルじゃん！

進歩や教訓って科学技術とかしかないの？さらにこのままじゃ（目には目と歯をー）になっちゃうよ。

ハムラビ法典でさえ（目には目以上の危害を与えてはならない）って意味もあるのに。

進化以前に退化してるって（苦笑）

戦争はいかなる理由であつてもしてはいけない。

戦争は癒えない傷と悲しみしか生まないのに。

そしてただ偶然そこで生きていた人びとが、いつも被害をこうむるのに……」

文面にするとなんて生意気なんでしょう。（赤面）

ともかく戦争は駄目です。私は頭悪くてちっぽけですが、それだけは言えます。

「世界平和」なんて大それたこと掲げるつもりはありません。でも、

「誰かが困っているなら力になりたい」っていうのはあたりまえのことです、それが大切なのだと思います。

なにやら意味不明ですいません（苦笑）。とりあえず、がんばります!!

ちなみにこの活動をきっかけに、国際ボランティアについても調べています。

どんな事でもかまいません。どなたか、入っている団体とか知っている事なんかありましたら

お手数ですが、こゝ一報いただけると恐縮です。よろしく願います。

戦争へ突き進む環境がつくられつつあるとき、ノーと言う市民たちが行動を起こした。地域のメディアはまだ健全だったんですね、大きく報道されました。日頃から平和活動をしてきた人たちがばかりでなく、大きな流れに逆らうことをためらっていた人たちの反応が強かったように思います。だって「自然な反応」でしょ。人殺しを肯定するのですか。

言い出しつべの浮田さんは、すでに八〇を超えた肝のすわった女性、集まったメンバーたちも年齢を重ねた女性が多かったのは、〈いのち〉の重みを知っているからでしょうか。戦争へ突つ走る状況を何とかしても止めたい、その一点で集まった市民一人ひとりの行動でした。

同じ頃、〈chance〉という行動も、こちらは若者中心・インターネット中心で、動き出しました。新しいスタイルの平和行動（ピースウォーク）を企画し、白いリボン行動の有志も参加しました。

戦争が始まった

一〇月八日、第四回行動のその日、アメリカは一方的に、報復という名目で、アフガンを攻撃しました。戦争を止めることができなかったくやしき、無力を感じました。でも、へこたれずに、空爆を止めさせようと訴え続けました。

街頭で、アフガン救援カンパをお願いし、ペシャワール会に届けるなど、活動も活発になりました。〈平和の白いリボン行動〉→〈平和の白いリボン行動実行委員会〉→〈平和の白いリボン行動・藤沢〉と呼び名も進化？しました。メディアの情報を鵜呑みにしないための「学習会」が必要でした。単独の活動に加えて、他団体と共催で行動することも増えました。こんなメッセージも発しました。

ブッシュ大統領は、日本人を誤解しているようです。

ブッシュ大統領が来日する機会に、みんなでアメリカ大統領に手紙を出しましょう。

私たちは私たちの気持ちを伝えようではありませんか。一〇万人の「ひとこと」は大きな世論になります。はっきりと意思表示をしましょう。

私たちは、アメリカ国家が「テロ」撲滅を理由に、他国の市民生活を破壊することなど、認めません。賛成しません。

中東パレスチナ、イスラム原理主義だけを、「テロ」と決めつけて攻撃するのは、アメリカのフェアな精神に反するのではないですか。「テロ」集団、「テロ」組織、「テロ」国家は、ほかにあります。すべての「テロ」を撲滅するのでしょうか？

武力に反対するなら、アメリカも武力を行使してはなりません。二〇〇二・一・一七 浮田久子

いかなる戦争・武力・暴力にも反対！ 平和を！！

スローガンを変えました。「テロ」という言葉の曖昧さ、決めつけ、を感じたからです。

一方的に攻撃された場合、これに反撃するのは、「レジスタンス」＝抵抗運動と呼ぶべきものだと思います。だからです。

私たちの「平和憲法」の精神を生かして、世界の平和をつくる言葉にしたいと思ったからです。

アメリカの戦争は、アフガン攻撃からイラク攻撃へとエスカレートし、それを無批判に支持してしまっている日本政府は、有事関連法を通し、自衛隊をイラクに派兵してしまいました。

私たちは、世界及び日本政府の動きが横道にそれないように正すための行動・アピールを続けなくてはなりません。昨年一月からは、イラク戦争はじめ世界のあらゆる戦争・紛争に反対し、「もう戦争は要らないー平和な世界を創り出そう」の合言葉のもとに集まった市民団体、NGO等の連合体〈World Peace Now〉に、私たちも呼びかけ団体の一つとして参加し、活動の環をひろげています。

藤沢での街頭行動は月一回定例、その他に学習会を企画したり、各地の行動や他の市民活動とも共同行動するなど、じっくり取り組んでいます。新しい平和活動グループも生まれています。これはいま配付しているチラシのアピールです。

自衛隊は即刻帰国してください

多国籍軍参加は、憲法違反です。

〈派兵〉ではなく、人びとの「いのち」を守る活動を期待します。

わたしたちは、有事関連法に反対します

一人ひとりの人権を尊重し、あらゆる紛争を平和的に解決しようというわたしたちの憲法の中に反し、周辺諸国に不安といたずらな警戒心を与えるだけの「有事法制」と、人びとの自由を奪う「国民保護法案」に、私たちは、反対します。戦争協力を強制しようとする日本政府に、強く抗議します。非暴力による 平和の創造を

暴力では何も解決しません。罪もない一般の人びとにとって、戦争とは、どれほどむごい、理不尽なものか、アフガンやイラク攻撃の現実が示しています。

わたしたちは日本に住むひとりとして、同時に地球に生きる一市民として、

良心と理性にもとづき、平和な世界を創造するために行動します。戦争には協力しません。

〈平和の白いリボン〉行動は、市民一人一人の自発的な活動です。政党や宗教とは関係ありません。

〈平和の白いリボン行動・藤沢〉

【参考 3年間の活動経過】

◆2001.9.18（第1回） ～ 2002.8.10（第20回）

- 2001年9月18日～11月23日
- 2001年12月9日～2002年2月16日
 - *10回 平和アピール街頭活動 2001年11月23日
- 2002年2月20日～3月24日
 - *パークレイからの訪問者を迎えて 2002年2月20日
 - *中国から歩平さんを迎えて 2002年3月1日
- 2002年4月6日～6月23日
 - *ビデオ報告会 2002年4月28日
- 2002年7月5日～9月14日
 - *ダグラス・ラミスさん 2002年8月31日
 - 【対話集会】 グローバルな視点からの「平和憲法」 パートⅠ
(ダグラス・ラミスさんと、バーバラ・リーさんの講演録は、
『あごろ』281号【今こそ言おう 戦争はノー】に掲載)

◆2002.9.14（第21回） ～ 2003.8.9（第33回）

- *第22回街頭行動（リボン配付）2002.10.12
褒 哲恩（ペー チョルン）さん
- 【対話集会】 グローバルな視点からの「平和憲法」 パートⅡ
対立ではなく共生を……在日コリアンと日本社会
- *緊急講演会 2002.11.21 ローレン・モレさん
——アメリカからの最新情報——
「ブッシュ世界政策に対するアメリカ市民の反対の声」
ローレン・モレさん（Ms.Leuren Moret）（Barclay 市 環境委員）
- *ピースパレード 2003.1.18 日比谷公園
わたしたちも[賛同団体]です
WORLD PEACE NOW 1.18
もう戦争はいらない
～わたしたちはイラク攻撃に反対します～
- *現地視察報告 2003.1.25（土）
阿部知子 衆議院議員 イラク（2002年12月）、アメリカ（2003年1月）
（講演録は、『あごろ』281号【今こそ言おう 戦争はノー】に掲載）

わたしたちも呼びかけ団体です。

*イラク攻撃反対 市民パレード・湘南 2003.3.21

藤沢の平和四団体行動

「平和の白いリボン行動・藤沢」

「平和ミュージカル・ふじさわ」

「平和都市をつくる会・ふじさわ」

「有事法制に反対する藤沢市民の会」

*World Peace Now 3.8 at 日比谷野外音楽堂～銀座コース

もう戦争はいらない～わたしたちはイラク攻撃に反対します～

*羽仁 カンタ さん 2003.3.29

グローバルな視点からの【対話集会】パートⅢ

「若者たちに平和のメッセージを如何に伝えていくか」

～～平和、環境問題、NGO等の考察から～～

共催：平和の白いリボン行動・藤沢

平和ミュージカル・ふじさわ

*山口 道孝 さん 2003.4.6

グローバルな視点からの【対話集会】パートⅣ

「経済格差が生み出した極貧地域の現状」

「先進国による Globalization が生み出す極貧地域の現状」

*第29回街頭行動 (リボン配布) 2003.4.27

*小森陽一さん 「教育基本法と教育の現状」

*6・8 戦争法はいらない 市民ピースパレード・湘南 2003.6.8

わかったでしょ!? 戦争のおろかさ・むごさ それでも必要? 有事法制

藤沢の平和四団体共催

*第32回街頭行動 (リボン配布) 2003.7.12

*北 宏一朗さん 「終わらない戦争 ～歴史が語る被害と加害～」

～現代の毒ガス(神栖、平塚、寒川、神栖町など

*第33回街頭行動 (リボン配布) 2003.8.9

*ビデオ上映会

・「ワールド・ピース・ナウ 2003年 春」(24分)

・「バーバラ・リーがやって来た」(20分)

◆2003.9.13(第34回) ～ 2004.8.14(第45回)

*教育って 国のため!? 2004.9.20

パネルディスカッション ～教育基本法見直しのゆくえ～

小森陽一さん、湘南の現場教師、浮田久子さん

※2003憲法を考える11・3集会 2004.11.3

戦争しない国からする国へ どう守る 私たちの人権
シンポジウム

吉田敏弘さん (フリージャーナリスト)

尹 健次さん (神奈川大学 外国語学部教授)

明珍美紀さん (毎日新聞記者、新聞労連委員長)

主催・かながわ憲法フォーラム

賛同・「平和の白いリボン行動・藤沢」

「平和ミュージカル・ふじさわ」

「平和都市をつくる会・ふじさわ」

「有事法制に反対する藤沢市民の会」

※第37回街頭行動 (リボン配付) 2003.12.13

& 藤沢の平和四団体行動

※志葉 玲さんによる「イラク・パレスチナ報告」 2004.1.31

共催・平和の白いリボン行動・藤／平和ミュージカル・ふじさわ

※第5回 『白井博子「地の塩賞」受賞』を祝う集い 2004.2.13

第5回の受賞は浮田久子さん (於 かながわ女性センター)

参照・あごら <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

※派兵反対 3・7市民パレード 2004.3.7

※イラク派兵を問う違憲訴訟! 箕輪登さんをお招きして 2004.4.23

「小泉さんは間違っている。イラク派兵は憲法違反」

& イラク派兵意見訴訟の会・東京の毎日訴訟運動報告

◆2004.9.11 (第46回 街頭行動) リボン配布

※あごら湘南号 発行予定

* * *

World Peace Now 関係 (誌面の都合上、数例のみ記載。

詳細はWPNのURL <http://www.worldpeacenow.jp/>をご参照下さい)

※1.18 イラク反戦集会、ピースパレード 日比谷野音

※3.2~3.8 ピースウィーク

※3.8 イラク反戦 日比谷野音

※3.21 イラク反戦・開戦抗議 芝公園など

※12.7 イラク派兵中止 水谷橋公園

2004年

※1.25 派兵反対 日比谷野音

※3.8~3.15 イラク邦人人質解放の為に首相官邸前緊急連日行動

※9.11 No more War! No more 9.11 at 明治公園 (つづく)



前進座十月公演

船山馨二原作

ジエームス三木二脚本・演出

美術 松野 潤
照明 森脇 清治
義太夫 竹本 駒之助
作曲 鶴澤 津賀寿
振付 吾妻 寛徳
効果 川名 あき
演出助手 橋本 英治
舞台監督 東 恒史

お盆盆丸

明治三十八年

幕末から維新へ——その疾風怒濤の時代。
加納家の人々を中心に繰り広げられる
愛と青春のドラマ。



制作 武蔵橋／山口孝治

10/5(火)～11(月・祝)

新国立劇場中劇場

10/2(土)・3(日)、13(水)～24(日)

吉祥寺前進座劇場

前進座東京営業所 Tel 0422(49)2811

市民がつくった藤沢市非核平和条例

——全国に先がけた条例誕生とその後—— 芝 実生子

私たち市民が運動してつくった藤沢市の非核平和条例、**「藤沢市核兵器廃絶平和推進の基本に関する条例」**が評価されているとすれば、それは、非核平和都市を宣言するだけではなく、より拘束力のある「市の条例」として、非核平和への行政の努力義務、市民の努力義務を、しっかりとつていているからだと思う。もっとも、いくらいいい条例があるからといって、それは日本国憲法と同じで、人びとの努力義務が果たされて初めて意味をもつわけで、いま、平和の危機を迎える厳しい状況の中で、私たちは、いっそうの継続した努力が求められている。

藤沢市の非核平和都市宣言と条例が制定された経過を、手持ちの資料から記憶をたどってみた。

まず、きっかけは、横須賀米軍基地に核搭載可能な空母ミッドウェーが強行入港したことから、にわかに藤沢上空が艦載機の飛行で煩わしくなったことに始まる。

わが国には「非核三原則」がありながら、一九七四年アメリカ上院での「核搭載能力のある戦艦には、核兵器を搭載している」というラロック元提督の証言。一九八一年ライシャワー元駐日大使の「核兵器搭載艦・機の通過、寄港は、核兵器の持ち込みには当たらない」という発言。さらに、横田基地でのブ

ローケンアロー（核事故想定訓練）などにみられるように、日本への核持ち込みの疑惑は深まるばかり。横須賀港に入港する空母ミッドウェーの艦載機は、厚木へ向け藤沢上空を通過することから、艦載機の核搭載の有無への市民の関心は高まり、危機感をもった人びとは、駆り立てられるように駅前サンパール広場に集まり、急ごしらえの市民グループとも核ごめんだ湘南青空会議を中心、市の「非核平和都市宣言」を求めてエネルギーギッシユな署名活動が始まり、学習会、映画会、フォーラムなども開いた。

市民の協力、労組の応援もあって、一万近い署名が集まり、ついに一九八二年六月、全国に先がけて「核兵器廃絶平和都市宣言」を成立させることができた。思い返すと、当時の市民の反応は、アンケート結果からも読めるように、大いに関心を持つものが八二％と、危機感や人権意識、そして政治に対する感性が今より健在であつたのかと思う。

宣言の成立後、これを記念して市は大きな記念事業を企画。多くの市民も参加協力して、成功を収めるのだが、大会終了後、参加市民はこれに満足できず、「行政の企画に補助的な参加は本意でない。今後は市民自らの発想で企画運営する」ことを求めた。

そこで一九八五年からは毎年春に市民を公募し、△平和の輪をひろげる一〇〇日間実行委員会▽を立ち上げ、市と市民が共働で、年々その活動を拡げていくことができた。この実行委員会への委託事業の規模は、私が宣言一〇周年の実行委員長を務めた頃には、市の「平和基金」を元手に予算はほぼ一〇〇〇万円に届くほどで、それでも各企画担当同士で予算の取り合いが続くほどに活発だった。国内でも非核平和宣言自治体が一、三〇〇を超えていた。

にもかかわらず世の中の不安材料は増すばかり。

いつもぶつかる壁は、反平和的行為に対する阻止、あるいは積極的な平和事業推進のための法的拘束力がないことだった。

私たちが国に「非核三原則の法制化」を求めるように、藤沢市にも「非核平和都市宣言」に基づいて日本国憲法と地方自治の精神に則して、市民の生活の安全を守り抜くための「非核平和条例」を制定させたいと、勉強会を重ね、各国の非核条例を研究し、一九八八年一月八日藤沢に非核条例を実現させる〇〇〇人の会✓発足のための準備会を持ち、運動を開始した。（〇〇〇人の会は、当初、仮の名称であったものが、そのまま正式名称になってしまった）

定例会では条例案が練られ、初めの案では、核兵器だけではなく、事故や攻撃目標とされた場合の被害の規模から考えて、原発も規制対象に含まれていた。勉強会や署名活動も計画された。

一九八〇年にイギリスのマンチェスターが、条例をとまなう非核都市宣言をしたことから、非核自治体運動は全世界に拡がり始めた。

マンチェスターを皮切りに、スペインのコルドバ、イタリアのペルージャで開かれた非核自治体国際会議。一九八九年二月、核保有国の本場アメリカ、オレゴン州ユージン市での第四回会議には、自治体の行政や議員だけではなく、日本からの提案で、一般人もオブザーバーとして参加することができた。

ソ連・東独を含め一三か国二四二人が登録、これにオレゴン大学の学生二〇〇人がボランティアで、見事な運営を実施。藤沢からは、葉山峻、藤沢市長と、△〇〇〇人の会✓から、土田 康、井之川平等、芝実生子らが参加、日本の状況を報告し、世界の非核自治体の運動の現状をみてきた。

とかく「平和の問題は国家レベルの問題で、自治体や市民レベルではない」と考えがちだ

が、核被害の影響に国境はないという核の特性から、「自治体だからできること、人権・市民の自治の問題としてやらなければならないこと」がある。国家・国境を超えた民衆同士の、この、点から線・面へと拡げていく平和戦略は可能であり、実に有効であること、非核自治体運動は確実に世界の一つの潮流となることを予感し、藤沢市が突破口となつて、非核条例を持つ自治体を拡げたい思いがいつそうつた。

一九八九年五月、私たちが署名活動を始めたころ、米国の市民団体が同国の情報公開法を使って調査した結果、実は一九六五年一二月、米空母タイコンデロガの水爆搭載機スカイホーク攻撃機が、沖縄近海で水没事故を起こしていたことがわかつた。

水爆は三〇〇五〇個積んでいたと思われ、二日後に空母は横須賀に入港、五日後にはベトナム戦争海域へ向かつた。

このことにより「非核三原則」の空洞化がいよいよ明らかに、人びとは大いにショックを受けた。一九八五年五月二八日、シンポジウム「いまなぜ市条例か」を市庁舎で開催。

内容は――

●非核条例と平和的生存権

憲法学者

浦田賢治

●軍縮と経済　そして神奈川の非核運動

経済学者

宮崎義一

●非核条例って何だ

弁護士

内藤雅義

●藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言から非核条例へ

〇〇〇人の会

芝　実生子

コーディネーター

〇〇〇人の会

井之川平等

また、多くの市民グループと提携して、定例会をたびたび開催。シールの普及。サンパール行動、署

名とビラまき。シンポジウムの記録を小冊子にして普及する、などの活動続けた。

漫画家・ビッグ錠氏からはカット六点が寄贈され、以後、署名用紙その他に大いに活用させていただいた。

しかし条例署名は平和都市宣言の署名ほどには市民の協力は得られなかった。一つには分かりにくさと、「どうせ何をやっても変わらない」といううしろけのようにみえた。しかし根気よく継続して署名活動をした。

被爆者、故土田 康さんの活動は、並はずれたものだった。署名活動も町内やバス停の行列をねらって片端から説得して集めていた、雨の日も雪の日も。また市議会対策も全議員一人ひとりを説得して回った。

また特筆すべきは、全国非核自治体の会長であった当時の市長・葉山 峻氏の平和への思いと行動力で、もし彼の活躍がなかったら、宣言も条例も難しかったと思う。

一九九〇年、グラスゴーの第五回非核自治体国際会議には八〇〇〇人の会から関根久男、広瀬健二、井之川平等、土田 康が参加。

そして一九九二年には横浜で第六回非核自治体国際会議が開かれ、藤沢市民が多数参加した。

△平和の輪をひろげる一〇〇日間実行委▽のこの年のメイン事業として、国際会議の地域版として、外国人参加者を藤沢に招き、平和フォーラムと交流会をもち大盛会であった。当日のパネラーは左記のとおり。

パネラー ニュージーランド元首相 デビッド・ロンギ

フィリピン・ケソン市副市長 チャリト・プラナス

明治学院大学教授

浅井基文

藤沢市民

浮田久子

被爆者

山口仙二

藤沢市長

葉山 峻

コーディネーター 物理学者

服部 学

このような活動の結果、藤沢市非核平和条例は、一九九五年、全国に先がけ市議会でも全会一致で採択され、△藤沢に非核条令を実現させる〇〇〇人の会▽は、その使命を終えたとして解散した。

現在、国内で非核宣言をした自治体は二六〇六、しかし、条例を制定したところは少ない。

さらに一九九八年、市と市民が共働する△平和の輪を広げる実行委員会▽は、藤沢市の非核平和条例制定記念事業として、ミュージカル『もつと平和にー』を、若者を中心に幅広い年代の出演者を公募して上演。そこで誕生した△平和ミュージカルふじさわ▽は、その後、市の財政援助から離れた後も、市民が勝手に条例制定を記念して、毎年一回、身近な戦跡や、平和、核の問題にこだわりつつ上演を続けている。手弁当ながら、四〇〇万円を上まわる上演経費も、平和と非核条例を守りたい人びとによって維持されている。

いま、来春の第七回公演『△もつと平和にー』に向けて創作に取り組んでいる。この『△もつと』は、もつともつと……（もつとの七乗）の意味である。市民の力で自治体に生まれた非核条例は、今後ともますます意義深いものとして機能していくだろう。

（△平和ミュージカルふじさわ▽共同代表

〈いのち〉を守る講座を続けて

—— 藤沢における〈いのちの講座〉 ——

矢口仁也

〈いのちの講座〉は、一九九九年五月二三日に、阿部知子医師の「脳死・臓器移植」から始まって、今年六月二〇日、保坂展人氏の「知っていますか？チャイルドライン」、矢口仁也の「その後の毒ガス問題について」など、市民の実行委員会主催のもとに、原則として隔月で藤沢市において計三三回開催してきております。当初は、阿部知子医師（小児科）を講師にお願ひし、子どもの〈いのち〉を中心とする医療関係の話題をシリーズで学習し、番外編としてコンサートなども実施してお互いの人間関係を深めてまいりました。

年度が変わって、この講座の在り方を更に深く話し合った結果、「リニューアルいのちの講座」という形でいっそう深め成長させていこうと、実行委員会も整備して、第一段、第二段、第三段と進めて今日までしました。その理由は、政治的、経済的、社会的状況が、私たち市民のいのち、生活などをますます脅かしてくる現実に対処していくためには、私たち市民が他に頼ることなく自らの力を持たなければならぬと気づき、そのためには事実を正しく学習し、批判力を育てる過程の中で、お互いに協力しあって動いていかなければならないという思いを強く自覚するようになったからです。私たちが市民としての主体性をはつきり持って学習し、行動し、思想、信条の違いがあっても、いま何をやらなければならぬかという主目標が共通すれば、共に行動していく広い市民の力が必要であると考えたからです。

こういう考え方、行動のなかから市民仲間として阿部知子さんにも協力を願ひ、私たちの代表として議員活動を十分にしていたたく一方、私たちも阿部さんを支持していく行動になったのです。

もちろん、一人ひとりの信条がありますから決議をしているわけではありません。このようにいろいろな立場にある多くの市民からの援助、協力を得ながら、実行委員会が最低月に一回は開かれ、企画、運営の任に当たり、宗教など他の組織と全く関係ない組織として動いております。このことは、三二回の講座でわかるように、私たちのいのち、生活、現実問題と密着したテーマで実施されています。

いのちの講座の「いのち」というのは、人間の肉体的な生命と、一人一人の人間の価値、個性という内面的な「いのち」という意味を持っています。この二つの「いのち」を最も大切なものとして、具体的な学習、行動によって求めつけ、自分自身を変革するとともに、より良き世界を創っていききたいと念じております。したがってこれからもこの講座を藤沢市民の主体的な活動として続けていき、広い市民の共感をえられるよう、努めていきたいと願っています。

「今までの講座の主なもの」

医療関係……国民保険、介護、エイズ、サーズ、鳥インフルエンザなど。

食料関係……風土に根ざした食、狂牛病、牛乳、遺伝子操作食品など。

教育関係……危ない教科書をめぐる諸問題など。

子ども関係……揺れ動く子どもたち・学校、子どもの保育や遊びの安全、平和と絵本と子どもたち、子ども水の事故、知っていますか？チャイルドライン、思春期の外来診療室など。

その他……憲法といのち、アフガニスタンから見たイラク復興、イラクでのいのち・生活をまもる支援、

その後の毒ガス問題に、日本軍が中国に遺してきたもの、など。（いのちの講座）代表

山川菊栄先生と私

大久保さわ子

生きてきた道筋で、私にいちばん大きな影響を与えてくださったのは、山川菊栄先生です。

先生のことをお話しすると、一冊の本でも足りないほどですが、先生とのふれあいの一端を、お話ししたいと思います。

菊栄先生との出会い

一九四八（昭和二三）年四月から、私は、国家試験による初の女性労働基準官として、神奈川労働基準局に勤務しました。

当時、初代婦人少年局長だった菊栄先生は、労基法の守り役として任務についた私ども（女の監督官は全国で六〇名ぐらい、全体の一〇％足らずだったでしょう）に、大きな期待と関心を持たれたように、先輩の紹介で藤沢の「みろくじ」の山川宅に伺った私に、「待っていましたよ」とばかり、監督行政の実情、女性労働者の実態について次々と質問がありました。

誠実さのにじみ出た静かな話し方でした。

私は何しろまだ二四歳のかけ出しですから、コチコチだったでしょう。しかし緊張しつつも、先生の関心の深さが伝わってきて、その熱意に新しい仕事で応えようと、勇気のわきあがったひとときだった

ことを思い出します。

以来、先生は私を「私の若い友人」といつて、事ごとに引きたててくださいました。

『婦人のこえ』企画刊行の時も（一九五三・昭和二八年）、社会党の機関誌『社会タイムズ』（『社会新報』の前身）の充実のため人材を求めた時（一九五六年頃か？も）、過分の評価のもと、いつも先生のお声がかかりました。

同じ藤沢の住人になって

居を東京から湘南方面に求めていた私は、山川先生のお宅にすぐ近い藤沢の公団の土地を入手することができました。

先生のお住居まで、歩いて十分もかからぬところ。必然ともいえるこの機縁に、私は「みろくじ」にすつ飛んでいつて報告しましたが、先生は、「まあ力強いこと」と相好をくずして歓迎の意を表して下さいました。

六七（昭和四二）年に、「人口の二分の一は女性なのに女の議員がいなのは何事ぞ」と、私がバン勇をふるつて市議選に立候補した時、先生のお声がかりをもつてしても、社会党は「推薦」すら拒否でしたが、先生は「私は下手で、こういうものは書かないんですよ」とおつしやりながら、ご達筆の色紙で励ましてくださいました。

選挙戦第一日目、第一声は、先生のご自宅の前。私はこの色紙を選挙カーに同乗させ、十日間頑張りました。が、何せド素人の選挙で、落選でした。

清く正しくよく

この一票を活かしよう

住みよの妹を

つくろために

一九二七年二月

山川菊子

けど、一言も選挙のことなど言ってませんでしたよ。真意を確かめましょう」から始まって、遂に立候補のハメになりましたが、腰痛で外での応援はなかったにしろ、先生のバックアップは何より力強く有難いものでした。

こんどは当選。

それから議員活動を報告にいく楽しみが加わりました。

「先生、ごめんなさい」と、お詫びにいくと「まあ、また頑張りなさい」と、ねぎらいの言葉で、万事終了。あとは広いお庭のまだ早い藤棚を眺めながら「毛虫の季節になったら退治に参りましょうね」などと約束して、おいとましたものでした。

ところが、その翌年の二月、思いがけず、市長選と市議補選（二議席）があり、候補者難もあつてか、こんどは社会党が私を押し出すべく、党の幹部がまず山川宅へ打診に行きました。

松のとれない一月はじめのことで、先生の「あの人は昨日も遊びにきてました

ところで、私が先生宅にお邪魔するのは、まことに氣まぐれで、二日とあけず出向いたり、三月も間をあけたりが無礼なものでした。あまり間があくと、「大久保さん、基準法四条違反の状況を調べてください」など電話がかかってきます。

歩行が不自由な先生は、私こときの訪問でも、たいそう喜んで下さいましたし、お伺いすれば必ず充実したお話になるので、いつも「しまった？ テープを持ってくるべきだった」のくりかえしでした。

今にして思えば、まこと身近に先生の聲咳に接しうる立場に居ながら、その利を活かさなかった自分が情けなく腹立たしく、とりかえしのつかない歴史的損失、歴史的罪惡を犯してしまったと、先に立たぬ後悔にほぞをかんでいます。

若い人を育てる真摯な姿勢

『婦人のこえ』廃刊の翌年、六二（昭和三七）年に誕生したのが、婦人間題懇話会（現・日本婦人間題懇話会）で、私はこの会の婦人労働部会に所属し、駒野陽子さんや、重藤都さんたちといっしょに、東京での会合を重ねたものでした。先生は杖を使い痛々しい歩き方になっても、東京・市ヶ谷の女子学生会館（後の私学生会館）のロビーなどに陣取る私たちの学習会に、必ず姿をみせてくださいました。

それは、いつまでも若々しい一学徒、一研究者のそれであり、私たちは先生を気づかいながらも、先生の卓越した論理の展開に引きこまれ、きたえられていきました。

歩行がさらに不自由になると、先生は、進んで自宅を開放して下さったので、労組婦人部の研究会や、婦人組織の学習会などを開きました。

ある時は籐椅子に深く腰をおろした先生の周りを取りかこむようにして、ある時は、居間の大きな掘りこたつに皆で足を突っ込み、先生は座椅子にしっかりと文えられ、補聴器に頼りながらでしたが、「先生といっしょに学びたい」という声があれば、橋渡ししてきた者としては、参加したすべての人の感動と満足感を、じかに先生に伝えることができたと思っています。

まったくベッドのご生活になったのは、国際婦人年の前の年でしたでしょうか。いつでも、出入りのできた私の目に映るのは、枕元の書籍であり、ご執筆の姿であり、イギリスから送ってくる英字新聞でした。「先生、頭のすげ替えができるなら脳ミソだけ置いていつて下さいナ」と、耳もとで大声を出す不躰な私に、思わず笑い出す先生でしたが、真剣にそう思ったくらい、すばらしい頭脳でした。

あらゆる差別を許さぬ思想

女子労働に対する先生の基本姿勢は、労基法四条の「同一労働同一賃金」の実現に集約されるということでも過言ではないでしょう。

「労働問題の中で、特に女子に関する部分、女子特有の問題をよく煮つめれば、結局は賃金問題であり、これこそ女子労働問題のアルファであり、オメガであると考えられる」（山川菊栄『二十世紀をあゆむ』）

しかし、先生は、労基法母性保護の条項の一つであり、わが国特有の規定といわれた「生理休暇」については、「考えもの」という問題提起をしておられました。

「生休は職場環境が劣悪のため必要とすることが多く、労働条件の向上によりカバーすべきもの。病的な人には病氣休暇制度を導入して対処するのが正しい。そもそも「保護」は、女子のみでなく、同じ人間として男女とも必要なこと」というのが先生のお考えでした。

日頃私は「生休」が、労使にもまた当の女子労働者にもあまりにも安易に扱われすぎていることに憤り、「いやしくも団体行動の戦術として、斉生休などあつてはならず、三九条の有給休暇一斉取得などとは質的に違う」と指摘しつづけていましたから、先生の主張が、労組婦人部などに激しく指弾された時も、山川説の共鳴者として私の考えを伝え続けました。

おわりに

皆さんからよく、「あなたは山川先生の直弟子」などとおだてられますが、決してそのような光栄をいただける身ではありません。



先生の名譽のためにも、「私は、ジカによくお会いできたから、ジカデシ、じきにお会いできる、じき弟子に過ぎなかった」と話します。

先生のユーモアあふれる表現力は定評のあるところで、これは精一ぱいのチャレンジですが、さて先生は苦笑いでしょう。

この不肖のデシは、先生の学説や残されたものの万分の一も消化できず、先生の周辺をうろろろしていただけですが、ただ、先生との交誼の中で私は、「トータルに物を考える」見方を教えられたと思っています。

たとえば、「生休」「同一賃金」のことでも、この二つは「差別」の視点からは同根であり、裏表をなすものだという認識です。

先生は、この道一すじの社会主義者といわれており、私もそのとおりに思っています。

先生の描く社会主義社会は、階級差別のみでなく、人種、性、身分など、あらゆる差別のない社会であり、そのためには、世界中が平和で、自由で、デモクラシーを大切にすればならないというものです。

このヒューマンな社会の実現を目的とする体制にして、はじめて真の社会主義といえるでしょう。

いつの間にか目的と手段が逆立ちして、権力の維持が自己目的となつてしまい、ソビエト連邦をはじめ、東欧諸国の社会主義政権が相次いで国民の支持を失い崩壊しました。

先生がご存命ならば、私はまた飛んでいってこれらの現象に対する見解をききたい。そして帰りには恐らく「先生こそ人間の顔をした社会主義者であり、ヒューマニストである」と胸を熱くしながら、みろくじの坂を登っていることでしょう。



東京に タカまいおりて 軍国化

「父と暮せば」と「華氏911」

太田 阿利佐

(毎日新聞 夕刊編集部記者)

原爆で生き残った娘の「恋の応援団長」として、幽霊の父親が大奮闘する映画「父と暮せば」(黒木和雄監督、井上ひさし原作)が好評だ。上映中の東京・岩波ホールでは夏休みということもあって連日満員の大盛況という。この作品の周辺を取材して、改めて「伝える」ことの大切さと難しさを考えさせられた。

映画が高い評価を受けているのは、黒木監督の力量や、娘役の宮沢りえさん、父親役の原田芳雄さんの好演も、もちろんある。けれども最も大きいのは、作家・丸谷才一さんをして「笑いと涙と、戦後日本の最高の喜劇」と言わしめた原作の力だろう。原爆という人類にとつての地獄を題材にしたこの作品は、驚くなかれ、コメディイなのだ。

原作はちょうど一〇年前の九四年に「こまつ座」によつて初演された。不勉強な私は、つい最近読んだのだが、ラストでは思わず大泣きしてしまい、美容室の人たちをびつくりさせた。(恥ずかしながら、美容院に向かう電車の中で読み始めたら止まらなくなり、パーマをかけながら読み続けていたのだ)。不思議なことに、大泣きした後に残るものは、果てのない悲しさではなく、胸が温かくなるような希望なのである。

映画化を打診され、井上さんは一つだけ条件をつけた。「外国語字幕をつけること」だ。「原爆の悲惨さを伝えることは、被爆国である日本の世界歴史に対する使命」と話す井上さんは、映画になれば海外でも見てもらえると考えた。

カンヌ映画祭で日本映画「誰も知らない」が高い評価を得たのは記憶に新しい。しかし、原爆映画は海外では評価されない、というのが映画界の常識だ。米国では原爆投下は正しいこととされているし、アジア諸国でも第二次世界大戦の加害国、日本が、原爆による被害者の側面を強調

することに心理的な抵抗が強い。けれども七月初めに東京の外国特派員協会で行われた英語字幕版の上映会を見る限り、この作品にはその常識を打ち破る力があるのでは、と感じた。

米国人記者は「アメリカ人は今、自分たちを守るために他者を攻撃することについて肯定的なムードが強い。だからこの映画がアメリカで上映されたとしても、多くの人が足を運ぶとは思えない。でも、もし観たら、原爆がいかに酷いものかというメッセージは十分伝わると思う」と話した。また別の米国人教師は「傷つけられた人間が、自分だけ生き残ったという罪悪感（サバイバーズ・ギルティ）に悩む。これは人類に共通の普遍的なテーマだ。世界中の人に、この作品をみてほしいと思う」と興奮気味に話していた。

上映後の会見で「なぜ原爆というテーマをコメディにしたのか」と問われ、井上さんはこう答えた。「地獄を地獄として描いても、そんなつらいものを誰も読まない。悲しいことを悲しく書くのは誰でもできる。悲しいことを楽しく書くのは、もう一つ上の技術です」。

米ブッシュ政権を指弾する映画「華氏911」のマイケル・ムーア監督は「ポップコーン片手に楽しめるドキュメンタリー」を目指したのだという。日本でも米国でも、イラク戦争とそれに続く暗いニュースにみんなが嫌々している。そのなかで多くの人びとに大切なことを伝えるには、正論や真実であるだけでは不十分で「伝えるための努力や技術」がいる。ジャーナリストと作家や映画監督はもちろん立場が違うが、憲法改正が取りざたされる今だからこそ、記者としてそのことを肝に銘じておきたいと思った。

「父と暮せば」は新潮文庫から三四〇円で発行されている。「英文対訳 父と暮せば」（一〇〇〇円）は、こまつ座発行（問い合わせは〇三・三八五一・六一八〇）。一読をお勧めする。

宜野湾市に、ついにへり墜落……浦島悦子

八月一日午後二時一五分頃、米軍の大型輸送ヘリコプターが、米海兵隊・普天間基地に隣接する沖縄国際大学構内に墜落・炎上した。

私はこのニュースを、その日、実家（鹿児島県）のお盆に出かけようとしていた那覇空港の待合室のテレビで知った。衝撃と同時に、「とうとうやつてしまったかー」という思いが真っ先に私を捉えた。

普天間基地の被害に苦しむ宜野湾市民がどんな日常生活を送っているのか、移設予定地の名護市民として実態を知りたいと訪ねた私たちに、「騒音には次第に慣れる。しかし、いつ落ちてくるかという恐怖には絶対慣れることができない」と語った人の言葉が耳元に蘇った。住宅密集地のど真ん中に居座る普天間基地は「世界一危険な基地」「いつ大惨事が起こってもおかしくない状況」だと言われ続けてきた。それがついに現実のものとなってしまったのだ。事故直後の臨時ニュースは多くを語らず、被害はどうな

のか、死傷者は出なかったのか、わき起こる不安を胸に、後ろ髪を引かれながら私は機上の人となった。実家に着いてから、はやる思いでテレビや新聞のニュースを丹念に見るが、オリンピックや高校野球に押されて実態の掴めないこと、おびたらしい。お盆で集まった親戚にも沖縄で起こったことへの関心はほとんどなく、「温度差」を痛感させられた。

想像を遙かに超える惨状

全国紙の報道で事故の概要はおおよそわかったが、臨場感がまったく感じられず、隔靴搔痒でもどかしい。市民に死傷者が出なかったことにひとまずホッとしたものの、墜落地点や部品等の落下の場所を示した地図を見て、背筋がぞつとした。帰沖してから、なまなましい現場写真とともに大見出しと多くの紙面を使って、連日この問題を取り上

げている地元紙の報道をまとめて読み、宜野湾市在住の友人たちの話を聞いて、人命が損傷しなかったのは、まさに奇跡だという思いを強くした。

墜落地点の周囲には保育所や小学校、多くの入院患者を抱える病院などがある。大学や小学校は夏休み中で人は少なかったものの、保育所の子どもたちはお昼寝の真っ最中だった。

「おかげで子どもたちがパニックにならずにすんだ」と保育士さんは語っているが、それは直撃しなかったから言えることで、もし、墜落地点が少しでもずれていればどうなったか、考えるだに恐ろしい。

あちこちに散乱して落下した部品等も民家の塀を壊し、塀を突き抜け、車を損傷し、それでも怪我人が出なかったのが不思議なくらいだ。宜野湾市に住むある友人は、「自分は神を信じる人間ではないが、今回は神の最後の警告ではないかと思った」と言う。この警告を無視すれば、次は必ず大惨事が起こるというのだ。

事故の報道に接してしばらく体のふるえが止まらなかったという人、現場に駆けつけて涙が止まらなくなった人、事故以来、また落ちるのではないかという恐怖で精神不安

定に陥っている人……。そんな住民の苦しみなど自分には何の関係もないよ、と言わんばかりに、この事故に大きな責任を負っているはずの日本国総理大臣・小泉純一郎氏は「夏休み中」で、何の反応もない。それどころか、わざわざ上京して総理に面会を求めた宜野湾市長も沖縄県知事も門前払いされてしまったのだ！

オリンピックの金メダリストに電話をかける暇はあっても、沖縄県民に心を配る暇はないらしい。別の友人の息子さんは「俺、テロをやる人の気持ちがかかるような気がするよ」と、ボソリと言ったという。

軍事優先の米軍と追従日本政府に怒り爆発

宜野湾市の伊波洋一市長は、日米両政府が約束した「五〇七年以内の返還」の期日がとうに過ぎているのに日本政府も沖縄県も重い腰を上げようとしない普天間問題の解決をめざし、「代替施設なしの五年以内の返還」を訴えるために基地所在市町村長として初の訪米「直訴」から帰国した直後だけに怒り心頭。事故現場に駆けつけたにもかかわらず立ち入りを拒否され、「米兵が自由に出入りできるの

に、沖縄はいつたい誰のものだ」と声を荒げたという。

米軍は日米地位協定を盾に、沖縄県警や宜野湾市消防の現場検証や立ち入りを拒否。墜落原因も明らかにできないまま、機体の残骸を勝手に持ち去ってしまった。また、宜野湾市や沖縄県が普天間基地での飛行停止や運用中止を求める中、輸送機の離着陸訓練（一五日より）や事故の同型機を除くヘリの飛行再開（二〇日）を強行。さらに二二日には、イラク派兵のために必要との理由で、事故を起こした同型機の飛行までも再開した。軍事優先、占領意識まる出しの米軍と、それに何の対策も取ろうとしない日本政府に市民・県民の怒りは増す一方だ。

宜野湾市では、伊波市長が米軍や日本政府、沖縄県などへの抗議や普天間基地閉鎖・全面返還の要請、市民・県民大会開催に向けた関係団体への働きかけなど精力的に動く一方、市議会が一七日の臨時議会で、「SACO（日米特別行動委員会）合意の見直しと、普天間基地の名護市辺野古沖移設計画の再考を求める抗議決議および意見書」を全会一致で可決、承認した。注目すべきなのは、「辺野古移設の中止」が野党会派（保守系）から提案されたことだ（保守系会派間の意見が一致せず「中止」は「再考」に卜

ーンダウンしたが、それでも画期的だ。一八日にはそれらの要請を携え、全議員三〇人で米国総領事館や米軍、沖縄県、那覇防衛施設局への抗議・要請行動を行なった。

「辺野古移設（県内移設）」では普天間問題の解決にはならない」という伊波市長のかねてからの主張が、今や保守を含む全市民の共通認識になったことを示している。

県内各市町村議会も相次いで、事故への抗議はもちろん、普天間の早期返還や閉鎖を求める決議を行なった。とりわけ多くの米軍基地を抱える本島中部市町村の危機感が強く、SACO合意や辺野古移設の中止にまで踏み込んだ決議も見られる。

及び腰の知事と県議会に抗議が続々

そんな中で、稲嶺恵一・沖縄県知事が普天間基地閉鎖も辺野古移設の見直しも求めないと言明したことに、多くの市民や県民の不満と不信が募っている。この期に及んでも「行政にベストはない」とか「前（大田）県政の二の舞（国を敵に回す）はしたくない」と言っている知事に、怒りを通り越して情けなささえ感じている人が（私も含め）

多い。県議会においても、事故後も変わらず辺野古移設を主張する与党の反対で、移設の見直しは決議できなかった。宜野湾市職労や、沖縄国際大学および同大の教員・職員組合、学生自治会はもとより、多くの労働組合、市民団体は、事故の直後から今日に至るまで、抗議決議や声明の発表、抗議行動などを続々と行なっている。

墜落一週間目の二〇日には、普天間基地周辺に住む女性たちでつくる「カマドウ小たちの集い」が普天間基地第二ゲート前での集会和、墜落現場までのキャンドル行進を行い、翌二二日には、平和運動センターなどの呼びかけで、労働組合、市民団体など二二〇〇人が参加して、普天間基地の即時閉鎖と無条件返還を求める県民集会が同所で持たれた。

普天間基地爆音訴訟団は二二日に第一ゲート前で集会を開いた後、九月五日に墜落現場の沖縄国際大学で開催予定の市民集会まで、ゲート前での座り込みを行う。

辺野古への移設賛成は四・三%、
SACCO見直しは九三%

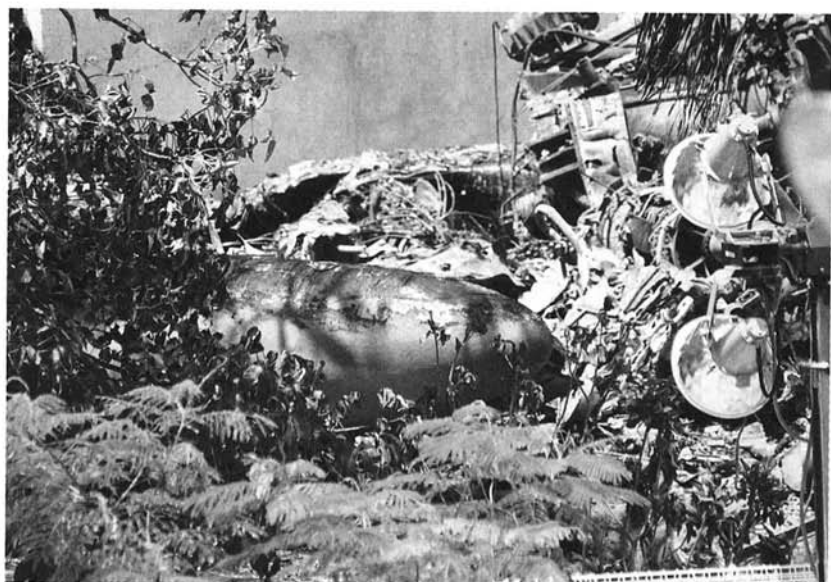
一方、移設予定地の辺野古で続けられている、基地建設のための海底ボーリング調査を阻止する座り込みは八月二十四日時点で二二八日を迎えた。事故の情報は座り込みテンにも衝撃と怒りを呼び起こし、今回の事故で移設が早まるのではないかという不安の声も聞かれる。

しかしながら、地元紙による事故後の緊急県民アンケートでは、辺野古移設を実現すべきだと答えた人は、わずか四・三%。SACCO合意を見直すべきだと考える人が九三%にのぼっている。

この県民世論と、辺野古の海に一指も触れさせないという決意をますます強める座り込みの力で、一日も早い普天間基地の閉鎖と辺野古移設の白紙撤回を実現させたい。それが、疲労も限界に達しつつある辺野古のオジイ、オバアたちをはじめ、私たちの切なる思いだ。

沖縄は占領地なのか？ 日本は植民地なのか？ 沸騰しつつある沖縄の怒りと悲しみを、どうか孤立させないでほしい。これは沖縄問題ではなく日本問題なのだ！

(フリーランス・ライター 名護市在住)



沖縄国際大学に墜落・炎上した米軍ヘリの残骸



墜落ヘリが接触して焼け焦げ、一部崩壊した大学本館。宜野湾市消防は構内に入らず、外で待機している。

歴史を拓くはじめの家

『うちなあ』10周年へのご案内

テーマ：いま、オキナワが問いかけるもの

とき：2004年11月8・9日

前夜祭 11月8日(月) 18:00~21:00

ライブハウス・エルパビリオン (夕食&交流会・会費3,000円)

(アクセスは108頁に)

オキナワ「愛と平和の歌」コンサート

出演：海勢頭豊 (月桃・喜瀬武原・さとうきびの花など、沖縄の平和を求める想いを歌い続けるシンガーソングライター)

那良伊千鳥 (西表の大自然と対話する暮らしのなかで育ち、島の愛の心を謡う)

特別出演：阿部紗奈江&高嶺久枝 (ソプラノと琉球舞踊のコラボレーション)

10周年のつどい 11月9日(火) 9:30~16:00 於：はじめの家うちなあ

話①…島袋淑子さん (平和の語り部)

沖縄戦の看護要員として学徒動員された“ひめゆり部隊”の生き残り。いま、平和学習の場として知られる糸数嶺のなかでの戦争体験を語れる数少ない存在。平和憲法の国・日本が戦争ができる国になろうとしていま、戦争の実相を語ります。

お話の後、希望者があれば糸数嶺への案内も予定しています。

話②〈新たな基地建設反対運動の現場から〉

普天間基地の返還の見返りとして、移設が予定されている名護市辺野古に、ジュゴンが生息する美しい珊瑚礁を埋め立てて海上基地が建設されようとしています。そのボーリング調査に抵抗して地元住民を中心に反対する人達が座り込みを続けています。(7月20日現在93日) その現場からの発言など。

〈いま、オキナワに生きる〉

芥川賞作家の目取真俊さんがつどいに参加します。島袋さんなどのお話を受けて、沖縄のいまを生きる戦後世代としての発言など。

話③…全国からの多彩な参加者による報告・発言

昼食…長寿食として知られる沖縄の郷土料理を用意しています。沖縄の先輩たちは食べ物を「ヌチグスイ」・命の薬といいます。素朴で見栄えは決して豪華とは言えませんが、医食同源を基本にした沖縄の庶民料理を味わいながら交流、心も身体も「ヌチグスイ」しましょう。

宿泊…今回は宿の特定は致しません。それぞれで確保していただきますようお願い致します。前夜祭の場所が那覇市内のため、那覇市内での宿泊をお勧め致します。ご希望があれば個別にホテルなどの紹介を致します。下記の事務局までお気軽にご相談下さい。

なお、つどい当日の「うちなあ」までの交通手段は、沖縄県内からの参加者も含め県庁前から貸し切りバスを用意しますのでご利用下さい。(車の方は裏表紙内側の地図参照)

参加申込について

◇前夜祭は食事を兼ねての交流会になりますので、事前に参加人数の確認が必要です。

*参加申込先 ☎900-0036 那覇市西2-12-1-501 源 啓美

TEL 098-864-0452&090-5025-2952

*ハガキか文書で簡単な自己紹介と、沖縄到着時刻、宿泊ホテルなどをお知らせ下さい。

事前・事後の沖縄観光のご相談もお気軽にどうぞ。

*申込期日…10月1日まで

【新連載】

「粘土だんご」で地球を緑に 1 本間裕子

あなたの「種」で世界が変わる

種（タネ）の仕分けに来ているNさんが言いました。「環境問題は人間問題だ」と。

「環境問題」というと、何か外側のことのように思えますが「環境」を現在のようにしてしまったのは、ほかならぬ私たち人間です。環境問題をつくってしまったのは、まさに人間の側。とても重々しい事実です。

「これから人間がどういう『生き方』を選んでいくか、いや選んでいる時間はない、自然に戻る以外に道はない。人間は、ただ自然にさえ仕えておけばよい」と福岡正信さんは言います。自然のものは必ず土に還り、多くを養い、育て、また土に還る循環を繰り返して続いています。「国民皆農論」を説き、独自の自然農法を実践している福岡さんは、その循環を生かし本来の自然にもどすために、「粘土だんご」蒔きを始めました。

それに賛同して「地球を緑に！」と日本全国の皆さんに「種集め」を呼びかけて五年。毎日、種が届きます。これまでに五百種類以上の植物種子がおよそ二十五トン集まり、そのうち九・四トンを中国へ送り、百キロはスペインとギリシャに、約三百キロはアフガニスタンに運びました。

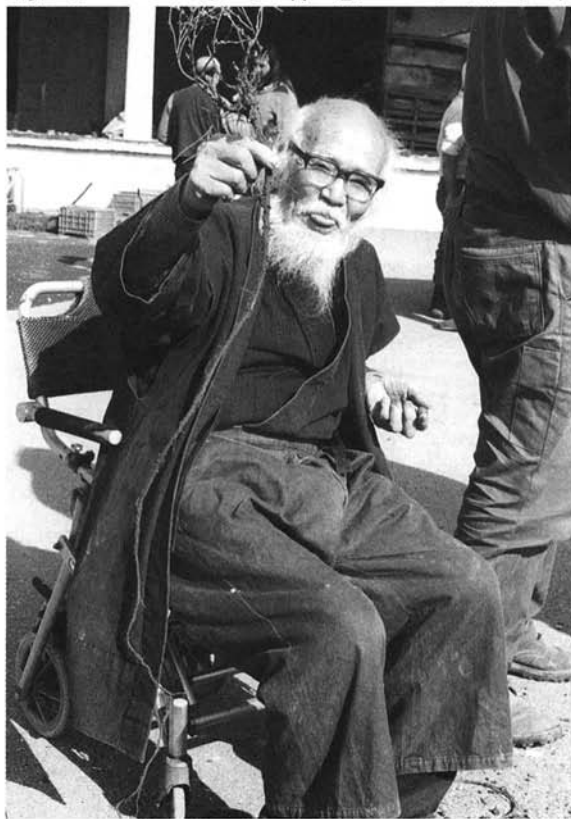
ひと夏に食べるスイカやメロンの種でアフリカの一国が救える

これは、福岡さんの言葉です。

福岡さんはこの「種集め」を、二十数年前から地域の新聞などを通して呼びかけてきましたが、一九八〇〜九〇年代は「使い捨て」という言葉にも象徴されるような時代で、種を集めて送ろうという人は少なく、なかなか浸透しませんでした。

ところが、この五年間は、種が届かない日はありません。異常気象、様々な事件が続き、日常生活で感じられる環境の変化に、このままではいけないと思うっている方、砂漠緑化に行くお金も時間もないという方も「種集め」なら身近な活動として参加できると、協力してくださいます。

「種集め」を通し、一人ひとりの行動が大きな力にな



「粘土だんご」の発案者、福岡正信さん(91歳)

ることを実感しています。

生ゴミとして捨てている野菜や果物の種も、土に戻せば根を張り、芽を出します。

大きな大きな「環境問題」も、普段の生活の中の、大きな可能性を秘めた小さな命「種」に気づいたら、解決への第一歩になるのでは、と感じています。

集めた種は、粘土だんごにして砂漠の緑化に役立てます。

粘土だんごとは？

粘土だんごとは、いろいろな種類の種、野菜、穀物、果樹、樹木、草花のあらゆる種を、その土地の粘土に混ぜ、だんご状にしたものです。だんごの大きさは、種の大きさによって異なりますが、野菜や草花の種の場合は、直径一・五センチほどの小さな玉です。

粘土は無菌状態の土なので、粘土に包まれた種は、ちょうど「土蔵の中」で守られているのと同じです。カビやバクテリアに侵されることもなく、種が鳥や虫に食べられるのを防いでいます。そして粘土は、土の中で最も保水性があり、種の発芽に必要な条件を備えています。

種を粘土で包んだ粘土だんごをポイポイ蒔けば、地面に接しただんごの一点を頼りに、種からまず一本の根が地中の湿り気を求めて勢いよく伸びていきます。そして生育に十分な水気に根が届いてから芽を出し、その地に適した植物が「自分の力」によって育っていきます。

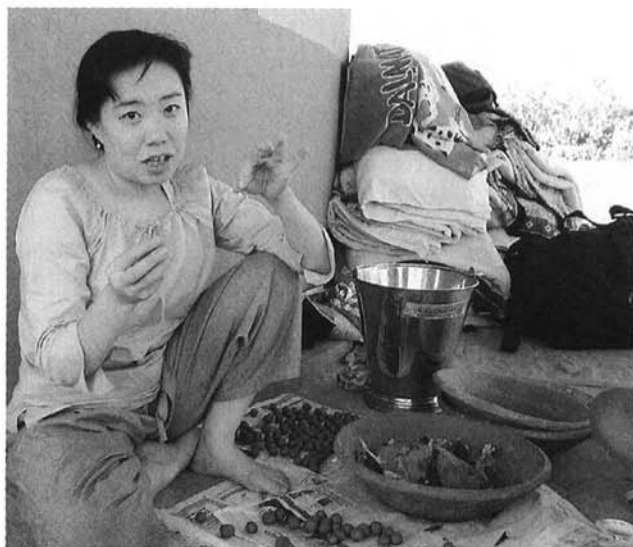
粘土だんご蒔きは「自然の邪魔をしないようお手伝いをするだけ」という立場に立った種蒔きです。

粘土だんごと砂漠緑化

およそ二十五年ほど前から、アメリカ、アフリカ、インド、ヨーロッパなど十五か国で砂漠緑化の方法として行なわれてきた「粘土だんご」蒔きは、もともとは緑化のためではなく、自然に沿った楽な稲作りの技術（米麦連続不耕起直播）として、一九五〇年に確立されたものなのです。

この稲作技術と「粘土だんご」の生みの親、世界を緑の楽園に変える自然農法の父、福岡正信さんは、一九一三年愛媛県伊予市生まれ。岐阜高農（現・岐阜大農学部）卒業後、横浜税関植物検査課勤務の二十五歳の時、「人知、人為は一切が無用」という結論に達し、そのことを実証するために「耕さず、肥料や農薬は使わず、除草しない（草は草で抑える）こと」を原則とした独自の自然農法を始め、高知県農事試験場勤務を経て、六十五年間実践、提唱してこられた自然農法の創始者です。

一九七五年刊行の『自然農法・わら一本の革命』は二十数か国語に翻訳され、世界の人のびとも影響を与え続けています。



2002年、インド・デラドンのヴァンダナ・シヴァさんの農場で粘土だんごづくりをする筆者

一九八八年にアジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞（公共福祉部門）を、一九九七年には地球環境保全に貢献した人を対象とした第一回アースカウンシル賞を受賞されました。

福岡さんが初めて海外に招かれたのは一九七九年、アメリカです。

その頃すでに英訳されていた『自然農法・わら一本の革命』が、当時の国連砂漠対策局長の目に留まり、「ミスターフクオカの本には、禿げ山だった所（愛媛県伊予市の自然農園）が緑豊かになった話を書いてある。あなたのやってきた自然農法は、まさに自然復活の方法だ。

イラン・イラクの砂漠をどうしたらよいか考えてほしい」と相談されたのをきっかけに、福岡さんは、それまで一度も見ただけのもなかった砂漠を緑にすることに取り組み始めました。

これまで訪れた国は一九八一年ヨーロッパ、八五年ソマリア、ケニア、エチオピア、八六年再びアメリカ、八八年インド、フィリピン、九一年タイ、九六年タンザニア、ベトナム、タイ、九七年インド、九八年ギリシャ、フィリピン、九九年イタリア、スペイン、二〇〇一年中国、〇二、〇四年インドなどで、それぞれの国で、粘土だんごによる緑化を指導しています。

（つづく）



1999年3月、スペイン・マヨルカ島での粘土だんごづくり

〈新連載〉足もとから日本を変える 1

〈あこめいと〉には、地方議員としてご活躍の方が、たくさんいらっしゃいます。

ご自分の活動内容を伝えるニュースも、事務局にはいろいろ送られてきます。

どの方も、すばらしい活動をしておられ、感動する毎日です。

これから毎号、そのご活動を、全国の皆様にお伝えしたいと思います。

東京・中野区を変える！

佐藤ひろこ

日本は、地域から変えるほかない。——そんな思いで、中野区議として働いています。無所属・二人会派です。具体的な活動の、ごく一部ですが、読んでいただければ幸いです。

（二〇〇四年第二回定例会一般質問から）

本会議の一般質問が、シティテレビ中野5チャンネルで、初めて放映された。

放映されたのは、各議員質問一二分答弁八分の部分だけだった。緊張した。

私にとってつらかったのは、無所属二人会派のため、質問時間が他の議員に比べて、半分ぐらいに短く制限されたこと。

——会派の人数で質問時間が割り当てられることになったからである。

原稿を何度も削った。区長答弁も時間が限られているせいか、「答弁もれ」もたくさんあった。時間切れで再質問の時間もなかった。残念。

徹底的に透明に、入札制度の改革を

透明性を高く

佐藤 目黒区では幹部職員、荒川区では助役が逮捕されるなど、入札・契約に関わる不正事件が後を絶たない。透明性を高めることが重要だ。

競争入札の書類は、契約担当の所でいつでも見られるようになってきているが、金額の低い随意契約はそれぞれの部で決めているので、どのようなものが何件あるか一括して把握されていない。一括して把握し、関係書類もいつでも公開できるように改善されるべきだ。

区長 随意契約についても、透明性を高めるために契約後の情報公開を検討したい。

分割発注をなくせ

佐藤 競争入札回避のための分割発注が、他の自治体でも問題になっている。過去五年間の財務監査結果報告を見ると、毎年、中野区でも分割発注があることが指摘されている。規則違反の行為である。なくすべきだ。

区長 分割発注は違法ともなりかねない、やるべきでないことだ。庁内徹底していきたい。

不正行為の排除を

佐藤 契約の透明性をさらに高め、不正行為を徹底排除するために、今後どのような取り組みをされるのか。

区長 電子入札システムを導入する取り組みをすすめている。最低制限価格の事前公表も検討している。

施設運営委託等にプロポーザルの基準を

佐藤 江古田の森保健福祉施設整備や高齢者会館運営委託

などで、事業者選定にあたって、いわゆるプロポーザル方式という企画競争入札の方法がとられている。価格だけで競わせるのではなく、その事業に応じて様々な基準を設定し公開し、総合的に基準に対する点数が高かったところに仕事を任せる方法。この手続きを定める必要があるのではないか。

区長 今後は民間の発想や提案、豊かな経験などを生かしたい場合、プロポーザル方式の入札が増える。現在、対象業務、選定基準、募集の方法等の基準作りを行なっている。

社会的価値の実現を

佐藤 これから、地域センターなども、区民団体やNPOなどに委託していくことになる。価格だけではなく、区民にとつて質の高い、公平なサービスが提供できるかどうかを重要な選定基準とするべきだ。基本構想審議会会長の武藤博巳教授が、社会的な価値を尊重する「政策入札」という考え方を提案している。環境、障害者雇用、男女共同参画、公正労働基準や区民の雇用割合への配慮など、民間事業者にも社会的価値を実現してもらうための誘導策を、ぜ

ひ、検討するべきだ。

区長 社会的価値基準による入札の考え方について、今後は例えば障害者や高齢者の雇用率なども審査項目に加えるなど検討しているところだ。

「人々の自由と尊厳」「市民主権」を明確にした新しい基本構想を

佐藤 「基本構想の基礎となる考え方」で、「人々の自由と尊厳を守り大切にすること」が基本理念の一番にあげられている。障害者団体の集まりで、区長は「自由と尊厳を守る」ことについて講演した。

新しい基本構想が今までと大きく違う点は、「市民への分権」を実現することだ。行政サービスの受け手として市民が位置づけられていた現在の基本構想から、公共サービスを生み出し実践する市民の力を大きく広げていくことが新たな基本構想の役割だ。この考え方をもつと前面に打ち出すべきだ。区長の考えは。

区長 憲法でも保障されている基本的人権のおもとにあるのが「人間の自由と尊厳」。新たな基本構想では障害のあ

る人、介護が必要な高齢者、すべての人びとがそれぞれに自立をした尊厳のある暮らしができる地域社会を目指すことが重要だ。障害者も高齢者もすべての区民が政策立案に参加をする、またサービス提供の担い手ともなれる、障害のあるなしにかかわらず自らの意志に基づき、自らの決定に基づき、社会に参加でき責任が持てる、そうした社会を目指すことを明確にするべきだという意見であった。

そうした考えも重視しながら基本構想の策定にあたる。

「自己決定・自己責任」と

「新しい公共」をわかりやすく

佐藤 基本構想の議論の中で基本となる言葉については、共通認識を持つておくべきだ。「自己決定・自己責任」という言葉もその一つ。もともとは社会的に弱い立場に置かれている人が、できるだけ自分で決められるようにしているという障害者の自立生活運動から生まれた考え方だ。だけれども自由で尊厳を守られるということは、自分のことをだれかに決められたりしないで、自分で決められ、自分で責任を取れるようになることだ。

しかし「自己決定・自己責任」に対して、「行政責任をほりだしている」という反応もある。わかりやすく表現するべきだ。

「区」も「公共」も、行政だけを指す言葉ではない。JRや私鉄などを公共交通機関というように、民間も「公共」の担い手。これからは、市民もNPOも民間企業も「公共」を担う主体になる。区長の考えは。

区長 公共の領域の中で区が果たす役割が何なのか、民が担える部分はどのような部分なのか、用語の整理が非常に重要だ。「自己決定・自己責任」も重要な概念なので、きちんと表現できるように工夫をしていきたい。

緑いっぱいの中野へ 緑の再生計画を

佐藤 緑が少ない中野区だからこそ、緑の保全や再生に取り組まなくてはならないが、検討案ではそれが強く打ち出されていない。緑の再生計画に区民団体と協働での取り組みを。

中野南口では、〈桃園に桃の花をいっぱい咲かせる会〉の手によって、駅前ロータリーなどに桃の木の植樹がされて

いる。北口でも既存の桜並木を拡大し、中野駅周辺を花の名所にする構想も立てられるのではないか。

警察大学跡地には武蔵野の林を再現してはどうか。先日見学した板橋区の民間住宅団地サンシティでは住民の植樹によりすばらしい武蔵野の林が再現されていた。警大跡地について、区長は防災公園はつくる、民間開発が主であるが必要な面積確保のために区が用地を取得することも考えていると言っている。警大跡地の公園について、緑の再生について、区長の考えは。

区長 「中野駅周辺まちづくり」計画の中では「緑豊かなまちづくり」を基本的な考え方として示す。警大跡地についても、既存の公園に加えて、開発者が提供する公開空地、公園などによって、三〇四ヘクタールのオープンスペースを確保していきたい。ご提案のような内容も参考にしたい。緑あふれる環境と都市の暮らしが調和したまちづくりをしていきたい。

あらゆる場で区民と議論を

佐藤 学校の再編、また、地域センターを区民団体に委託し

区民活動センターにするなど、大きな改革案が出されている。しかし、対話集会への参加者が少ない。地域センター、児童館、学校などで積極的に呼び掛けたり、施設配置・運営等について話し合いを持ってきたのか。区民を巻き込んだの呼びかけが全庁的に行なわれていないのではないかと？

区長 現在は検討の第一段階の意見交換と考えていて、これからさまざまな団体や地域ごとの説明の機会を設ける。職員一人一人が基本構想策定にあたっての考え方を十分理解して、説明、話し合いできるようにしていきたい。

通所施設でも医療的ケアを

佐藤 「医療的ケア通所施設で、杉並区が手引書」の記事が新聞に載った。中野区の生活実習所では経管栄養が必要な人のため、やっと週二回だけ看護士が対応することになったが、あとは午前中で帰る状態が続いているようだ。厚生労働省は福祉職員の医療的ケアを基本的には認めていない。しかし、杉並区は必要な人がいるのだからなんとかしようと、前向きな姿勢で取り組んだ。中野区でも前向きに取り組むべきだ。

保健福祉部長 区が定めた医療的ケア実施基準に基づいて、

看護士や保健士が可能な範囲で実施している。より充実していく方策について今後検討をすすめていきたい。

審議会等の女性の参画率四〇％に

佐藤 五月に中野区が設置した「中野駅周辺まちづくり区民検討会」では、女性の委員が一人で、「会議の構成員の性別に偏りが生じないように積極的に努める」とした。中野区男女平等基本条例の趣旨に反する状態だ。今後はこういうことがないように、条例の趣旨の徹底を全庁的に図るべきだ。付属機関における女性の参画率四〇％を目指している進捗状況がHPに公開されているが、達成できたのか。区長 公募のほか、関係団体からの推薦が重要だったことがあって、結果として委員の性別に偏りが生じた。条例に照らして望ましい状態だと思っていない。

今後は各種団体に委員の推薦を依頼する場合、可能な限り性別に偏りが生じないように、依頼の仕方を工夫して、会議等への女性の参画につとめていきたい。一七年度半ばには目標全体を達成したい。

「投票権は人権」の重み

今度の参議院選挙から郵便投票制度が拡大された。対象者が介護保険で「要介護五の方」にも拡大され、また、投票所に行くことができず、意志はあっても自分で書くことができない、最重度の障害を持つ方にも、代理記載による郵便投票が認められた。郵便投票は、ALSの難病になった中野区在住のSさんが最初に声をあげ、やっと一〇年たって制度化された。初めての制度なのでわかりやすく説明するようにと、私は区の選挙にあらかじめ伝えた。それなのに、選挙前の区報で、今回から始まった「制度の拡大」については紹介されておらず、「ご自分で署名できる方」と間違って書かれていた。今回の制度改正の最大のポイントは「自分で署名できない」障害のある方も投票できるようになったことだ。さっそく選挙に抗議の電話。七月四日の区報で訂正された。

ところが、郵便投票の申請の締切日、七月七日の翌日に「申請を認めてもらえなかった」という電話をいただいた。「四肢体幹機能障害一級」の障害者手帳を添えて申請したALS

患者の方の申請を、中野区選管は認めなかったというのだ。

区選管の理由は、都選管に問い合わせたが、公職選挙法のとおり「上肢一級」と障害手帳に書かれていなかったからだめだと言われた。急ぎ、私は総務省や東京都に電話し、訴えた。都の担当者は、「法律に書いてある以上の判断はできない。疑義がある場合は都知事に申し立てて証明書をもろう方法がある。一か月はかかるので、今回の選挙はあきらめてほしい。」と言った。

こんなことで選挙権が行使できないなんてひどい。「四肢体幹には上肢も含まれている。やっと選挙権が拡大されたのに使えないのはおかしい。四肢体幹で認めている自治体もある。福祉局と至急検討してほしい」と食い下がった。

その後一転、夕方、中野区選管から「認めます」と電話がきた。中野区と東京都が急ぎよ協議し、認めるという判断をしたそうだ。やっと獲得した選挙権をAさんは行使できた。

「ダメなことばダメ」と反対

防災会議条例改正に反対

自衛隊を中野区防災会議のメンバーにするよう、改正す

るというもの。自衛隊は区長の指揮下に入らない組織である。うまくいくのだろうか。賛成多数で可決。

HPの日記から

議員派遣議案に退席

競馬場視察に費用弁償を出す議案。私は費用弁償のあり方に疑問を持ってきた。退席は私ひとりだけ、全員賛成で可決。

ゆで卵を持って自立支援

六月一〇日「中野夜回りの会」で、ホームレス自立支援のために中野駅周辺を歩いた。メンバーのほとんどが若者達。「おじさん、体の調子どう？」と公園で寝ている人たちに声をかけ、ゆで卵と生活支援の情報を書いたチラシを渡す。何回もの声かけで心を開いてくると、健康状態のこと、住まいのことなど相談を受けるようになる。若い人たちがなぜ、ホームレス支援の活動をしてみようと思ったのか、動機もいろいろだが、社会の底辺を見つめ、支えようとする彼らの真摯な姿には心がうたれる。

日本国民は
 恒^{とこ}之^の平和^を念^{ねん}願^{がん}し
 人^{ひと}同^{どう}相^{そう}互^ごの関^{かん}係^{けい}を支配^しす
 崇高^{すうこう}な理^り想^{きよう}を
 深く自^{みづか}覚^{かく}するの^{ため}に
 平和^{へい}を愛^{あい}す
 諸^{しよ}国^{こく}民^{みん}の公^{こう}正^{せい}と信^{しん}義^ぎに
 われらの
 信^{しん}頼^{らい}して
 安全^{あんぜん}と生^{せい}存^{ぞん}を保^ほ持^じしよと
 決^{けつ}意^いした

われら
 全^{けん}世^{せい}界^{かい}の国^{こく}民^{みん}が
 現^{げん}時^じと之^の欠^{けつ}乏^{ぱう}から免^{まぬ}れ
 平和^{へい}のう^ちに
 生^{せい}存^{ぞん}す^る権^{けん}利^りを
 有^{ゆう}する^{こと}を確^{かく}認^{にん}する
 われらは
 いずれの国^{こく}家^かも
 自^じ國^{こく}の^{こと}のみ^に専^{せん}念^{ねん}して

われら
 平和を維持し
 専制と隷従
 圧迫と偏狭を
 地上から永遠に除去
 求めてゐる国際社会において
 名譽ある地位を思ふ
 占めたい

古川 寛著

他國を無視しては
 政治道徳の法則は
 普遍的なものである
 この法則に従うものは
 自國の主權を維持し
 他國と對等關係に立つる
 各國の義務である

日本國民は
 國家の名譽にあり
 國家の利益にあり
 全力を盡して
 奮起する

機会均等法改正案まとまる

日本の男女雇用機会均等法は、国連からも改善の指摘を受けていたが、厚労省の男女雇用機会均等政策研究会（座長・奥山良明成城大教授）は、六月二二日、かねて検討していた四項目の改正に関わる報告書を発表した。

「産休などを理由とする不利益取扱い」現行法では産休などに対して解雇以外の不利益取扱いを規制する規定はないが、諸外国の法制を踏まえれば、現職または現職相当職への復帰を求めることも合理性がある。

「間接差別の禁止」「あらかじめイメージを示し、予測可能性を高めることが必要」として、「職務と関連がないのに、募集・採用に当たって身長・体重・体力を要件にするなどの禁止」など、該当例を示し、明確化。

「ポジティブアクションの効果的推進方策」雇用状況報告を義務づけるなどの規制的手法を用いれば一定の成果が上

がることが期待されるが、企業・行政のコストもかさむとして、「費用対効果の工夫」など留意点を示した。

国連の「日本政府名さしの勧告」の経過もあり、成果を期待していた女性たちにとっては、いずれも歯切れの悪い勧告となつり、これに対する改革案を各地で検討中。

政府が示す二〇二〇年の女性未来像

細田官房長官の私的懇談会「男女共同参画社会の将来像検討会」（座長・本田和子お茶の水女子大学長）は、六月二五日、報告書「男女共同参画社会は日本社会の希望」をまとめ、細田長官に提出した。

日本が目指すべき男女共同参画社会の具体像を示したこの報告書は、経済・社会の現状を分析して、男女共同参画社会を形成する際の具体像を、政策・方針決定過程、働く場、家庭、地域など、〈地域社会〉の五つの分野で取組み

を進めた場合の二〇二〇年像を、たとえば「働く場」では、パート化、在宅化、自営化など流動する現場を分析しつつ、男女の均等な機会と待遇を実質的に確保する方針を明示する一方、「社会保障制度や税制などを中立化することなど」によって、二〇二〇年には夫婦共稼ぎ世帯が増える一方、「専業主夫」も珍しくなくなる」などリアルに描き、政府の提案としては、かなり斬新な内容となった。

国家公務員の「仕事と家事両立支援」を 人事院が提言

人事院の「多様な勤務形態に関する研究会」（座長・佐藤博樹東大社会科学研究所教授）は、七月一三日、中間取りまとめを人事院職員福祉局長に提出、両立支援の対応策として、「短時間勤務制度の導入」「在宅勤務等の活用」「子どもの看護休暇を年四〇時間まで取得できるようにする」「産前・産後期間中の妻の配偶者の育児休業・部分休業の取得促進」などを提言した。

八・九に美浜原発死傷事故発生

〈長崎の日〉八・九に、福井県美浜町の関西電力美浜原子力発電所の三号機の給水配管が破断、下請け従業員四名が即死、七名が重軽傷を負った。問題の配管は、一・四ミリ以下の薄さになっていたと推定された。

配管については下請け業者が点検の必要性を早くから提案していたと伝えられるが、関電に無視されていたという。破断により死傷したのは、結局下請け業者だった。原発業者の側からは、「放射能放出事故ではない」の聲が早くも出たことに、一般人の不安は、さらに強まっている。諸悪の根源は、二重三重の利潤追求構造にある。それを追求した『あごら』286号、『原発その恐るべき実態』をぜひ再読してほしい。

自殺者ついに三万四千二百七人に

年々増え続ける自殺者。〇三年は〇二年より二、二八四人も増加、統計が始まった七八年以來の最多の三万四千二百七

人になった（七月二日、警察庁発表）。

男女比では、男性が七二・五％で二万四、九六三人、女性が二七・五％で九、四六四人。圧倒的に男性が多い。

自殺の原因としては、九九年以降減り続けていた「健康」が、一転して大幅に増加したとはいえ、自殺の原因のトップを占め続けている「経済・生活問題」も大幅に増加し、家計を支える男性の負担の大きさを如実に示した。

年代では二〇代・三〇代が前年より増えたが、最多が六〇年代以上であることは一貫して変わっていない。

国家公務員Ⅰ種合格女性、初めて三〇〇人に

政府は、中央省庁の幹部候補となる「国家公務員Ⅰ種の女性合格者数」の増加を方針として打ち出していたが、六月二日発表された〇四年度採用試験の合格者発表では、前年度の二六四人より四〇人多い三〇四人が女性で、初めて三〇〇人に達した。女性が占める割合も、一五・一％が一七・三％に向上、合格実数でも合格率でも過去最高に達した。

とはいえ、改正された今年でも、女性は男性のわずか六分の一という状況。これでは、〈男型志向の政策〉は変わらない。

年金また過払いミス八億円

社会保険庁は、老齢基礎年金の振替加算ミスで、昨夏、四万人、二七四億円もの過払い・未払いが発覚し、陳謝したのに、今夏も全国約七〇〇人に約八億円の過払いをしていたことが発覚した。

昨夏、発覚に際し、「今後は発覚時点ですぐ公表する」と公約したのにもかかわらず、二月に発覚した事態を七月二日公表、「どこまで腐る社保庁ぞ」の声、声。

「振替加算」とは、国民皆年金になる八六年以前の未加入者で年金額が低く、配偶者が若い場合などに支給される給年金を、配偶者が六五歳になった段階で配偶者自身の基礎年金に振替えて加算する仕組みだが、さまざまな計算システム自体、欠陥が多いのでは……と「社保庁不信」は増幅する一方。

九条論議活発化

経団連奥田碩氏は、「市況の（軍需産業による）活性化のためには九条の見直しが必要」と発言。これを受けた経団連夏季セミナー（七月二二～二三日）では活発な討論。

（米軍による）安全保障がなければ経済成長は困難。九条の見直しは避けられない」（三木繁光・東京三菱銀行会長）に対し、「軍隊を持たないことが寄与した点も含めてきちんとした議論が必要」（勝俣恒久・東京電力社長）など慎重論も出た。

民主党岡田党首は、「安全保障のための自衛隊の公認」を明示、この（改憲）の危機に（国際婦人年連絡会）はじめ各女性団体、市民団体は、憲法九条の学習会を各地で開き始めた。

例年以上の盛会 8・15

想像以上のオリンピックの成果に、新聞もテレビもメダル・日の丸ムード一色となった八月だったが、ひたひたと

押し寄せる改憲の波を危惧して、九条や非戦をテーマにした集会も、例年以上に盛り上がった。

東京（平和遺族会）の集会では、元レバノン大使、天木直人さんが「被爆国日本が平和憲法を主張すれば、どの国も無視できないのに！」と政府のアメリカ追従を批判。集会（新たな「平和への準備」——イラク・憲法・教育基本法を考える）では、高橋哲哉東大教授が「米国に協力、国連軍に加わって海外の戦争への積極的な加担を計る日本。そのための改憲、教育基本法の改悪が着々進められている」と強く警告。

そのほか全国各地で集会やデモのほか各種の戦争展、演劇人による朗読の会等々が、猛暑の中にも多くの参加者を集めた。

参議院に初の女性議長

衆議院議長に土井たか子さんが就任したときは「社会党つぶしの陰謀」の声とともに「三権の長に初めて女性が……」の声もあったが、扇千景議長には、反響はほとんどゼロ。

東京都、へつくる会の教科書を採択

扶桑社刊〈新しい歴史教科書をつくる会〉の教科書は、あまりにも偏っていると、全国で〇・〇三九%しか採用していないが、東京都は、〇五年から都立初の中高一貫校となる白鷗高校中等部の教科書に扶桑社を採用することを発表、石原知事のジェンダーバックラッシュ政策発表と相まって、都民ばかりでなく、全国各地からも採用中止を求める声があがっている。

人名漢字に批判続出

法相の審議機関・法制が審議会人名用漢字（名前に使える漢字）として、五七八字を追加公表したところ、抗議が殺到、同審議会は協議を再開した。

とくに不評だったのは、糞・屍・呪・癌・姦・妾・蔑・尻など。このため、特に不評だった字は削除したが、そもそもこのような文字をなぜ加えたのか。審議会の委員には多額の謝金が払われる。公費乱用もいいところ。委員も一

新すべきでは。

現在の法制審議会人名用漢字部会委員は、

阿辻哲次 京都大学教授

石川雅己 全国連合戸籍事務協議会長（千代田区長）

甲斐睦朗 国立国語研究所長

金武伸弥 日本新聞協会用語専門委員会

鎌田 薫 早稲田大学教授（部会長）

奥水 優 日本大学教授・東京外国語大学名誉教授

野中ともよ ジャーナリスト

房村精一 法務省民事局長

黛まどか 俳人

深山卓也 法務省大臣官房審議官

初の女性主計官誕生

七月二日、財務省の主計官に片山さつきさん（四五）を任命。女性初の〈主計官〉が誕生した。片山さんは八二年、東大法学部卒、政策評価室長関税局関税企画官などを歴任。主計官としては防衛関係費の査定を担当する。

会と催し



米軍ヘリ墜落事故に抗議！

熱気に包まれた緊急国会集会

コトがあると聞かれる国会内の集会でも、この集会ほど人があふれた集会はなかった。八月二六日十三時、衆議院第二議員会館第一会議室は、すぐ満室になり、急ぎよ別室にテレビを設けて現場中継、そこも人があふれ出た。

呼びかけ人は衆議院Ⅱ東門・照屋・赤嶺、参議院Ⅱ大田・糸数・喜納の、沖縄出身議員六人。司会は糸数慶子さん。

金田誠一衆議院沖縄北方特別委員長の挨拶に続き、まず墜落炎上の現場のなまましいビデオを上映。各議員のほか宜野湾市職労大城委員長が、「大学の職員・学生は言うに及ばず、地域住民のすべてが死の恐怖に直面したこと、現場の土まできき集めて持ち去る一方、事故直後から現場を封鎖、大学当局も日本の警察も市当局も、一步も近寄せぬ警戒体制を敷き、劣化ウランなど特殊な兵器を運搬してい

た疑惑を深めさせるとともに、基地の外まで米軍の治外法権下にある現実を示した」と克明に報告。

会場には一般の活動家のほか、国会議員も菅さんほか二人もが出席、この現実を覚えるのにはどうすればよいか、熱い討論が続いた。

宜野湾市長と沖縄国際大学長からも切々としたメッセージが寄せられ、全員、この問題解決のために死力を尽くすことを誓いあつて下記の抗議声明を発表した。

●沖縄県民の生命と財産を守るために、民間地上空での米軍機飛行を即時停止させること。

●事故再発の危険性が極めて高い普天間基地の飛行場としての運用を一日も早く閉鎖すること。

●日本政府は、事故直後の米軍による治外法権的な事故処理について、米国に厳しく抗議し謝罪を求めること。

●小泉純一郎首相をはじめ、関係閣僚は墜落現場を視察し、危険極まりない状況を自ら掌握し、対策を練ること。

●事故原因の徹底究明を米軍まかせにするのではなく、日

本の関係機関が責任をもって行ない、その結果をすべて公表すること。

●事故による物的・營業的・精神的な被害など、すべての被害への完全補償と、死の恐怖を強いられた市民・学生・職員らにきめ細かい心的ケアを継続しておこなうこと。

●米軍に特権・免除を与えている日米地位協定を、全面的かつ早期に改定すること。

●普天間基地の名護市辺野古への「移設・新設」を中止し、即時無条件撤去に向けての日米政府間交渉を直ちに行うこと。

(R)

今年も嵐山で男女共同参画のための

女性学・ジェンダー研究・交流フォーラム

国立女性教育会館での毎年恒例のフォーラム。今年は八月二七〜二九日。テーマは「二一世紀の男女平等・開発・平和——いま、私たちはつくる」。

約一六〇〇人の参加者が集まった。恒例の大ホールでの講演会は、今年は著名学者の講演ではなく、さまざまな分

野で活動する若手のトークインでフレッシュな印象。全国からの参加者の各種各様のワークショップも、どれも盛況だった。

〈あこら〉では「宜野湾米軍ヘリ墜落事故を考える」をテーマに、談話室で緊急ミニ集会。今後どう行動していくべきか、沖縄の方もたくさんつめかけ、熱心な話し合いは夜更けまで続いた。

私たちは沖縄の人たちのおかれている状況をどれほどわかり、声をあげ、行動してきただろうか。沖縄の基地全面廃止に向け、まず、ヤマトから行動し、広く深く連帯していくことを新たに強く心に誓った。

(U)

盛り上がった平和と文化の集い

東京の高齢者が新しい生き方を模索して集まっている〈東京高齢協〉のメンバーによる〈朗読劇団・八月座〉が八月七日、東京・豊島公会堂で旗揚げ公演した。新聞に紹介されたこともあり、会場は満席。

〈八月座〉は、イラクへの自衛隊派遣に危機感をもつ、戦争体験世代一人ひとりが、自ら語り部としての役割に使命

感をいだいて結成した高齢者のしろうと朗読劇団。座長の荒井なみ子さんは八六歳。一八名の座員の平均年齢も七〇歳を超えるが、全員わかかわかしい。

今回初公演の朗読劇『無言館を訪ねて』は、荒井なみ子さんの長男でフリー映画監督の孝志さんの構成。

一行は六月、信州上田の常楽寺でプレ公演したが、公演前日、無言館を訪れ、館主・窪島誠一郎さんの「遠い見知らぬ異国で死んだ、画学生よ、私はあなたを知らない」ではじまる詩に出会い、戦没画学生の絵や写真、手紙などの展示に、「否応なく戦争にかり出されて無念の死を遂げた若人」に思いを馳せた、という。

座長の荒井なみ子さんは「朗読者とは魔物（戦争）の足音も、天空への夢も、無念のうちに戦で死んだ兄や息子た

〈あごら湘南〉感謝の集い 浮田久子さんを囲んで

皆様のお力で〈湘南号〉ができました。浮田さんを囲んで、いろいろなことを話し合いたいと思います。

開催時間 十一月十八日（木）十時～十二時

場所 藤沢市民会館 第三会議室

問い合わせ 03-3354-3941

ちへの思いも、すべて語り紡いで訴える作業者であり、芸術的創造者である」と自分史のなかで語っている人。座員は、プロではないが、戦争を風化させてはいけないという熱い思い。凛とした声音は聞き手に素直に伝わり、深い感動に包まれた。

ほかに樋口恵子さんの講演『長寿社会の豊かさと貧しさ』五九年目の八月に考える』と、常識にとられない自由な発想から生まれたアコースティックな音楽集団、ロス・ネリモスの演奏。フルート奏者・綱川泰典の美しい音色に心地よく酔い、悠玄亭玉八の「お座敷芸」に大笑い。こんなに盛りだくさんなのに、参加費千円は安い！と、感激の半日を過ごした。〈高齢協〉では毎年八月に公演を予定している由。一層の発展を祈りたい。

(W)

試写室

名もない新人監督が描いた心の詩

第60回ヴェネチア国際映画祭金獅子賞受賞

父、帰る

どこまでも果てしなく広がるロシアの大地。空。海。川。

ドラマはその自然を背景に音もなく展開する。

十二年ぶりに突然帰ってきた父親。母は、その喜びを胸にしまつて、二人の息子との旅を父親にすすめる。

現われた見知らぬ男を、パパとは呼

べない二人。

やがて兄は少しずつ男に慣れていくが、弟は、どうしても認めることができない。

森で海辺で島で仮泊しながら、「大人の男」の実力を示す父。抵抗を続ける二人。

淡々と展開するひとこまひとこまなの、なぜか一秒も目をそらせない。

——そして一時間五十分。

ロシアの大地、ロシアの空、ロシアの雨、ロシアの大人とロシアの少年に、無言でつきあい続けた観衆は、長いエンド・タイトルに、小さな、読めないロシア文字が延々と続いて、誰ひとり席を立とうとしない。

ひとりひとりの心の奥に、これほど深く問いかける映画があったのだろうか。

感動で、私は言葉を失った。

二〇〇三年のベネチア映画祭。この



「父、帰る」の幕が降りて一五分開。拍手は鳴りやまなかったという。

そして最終日。北野武、アレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥらの高い前評判を抑え、ロシアの若い新人、アンドレイ・ズビヤギンツェフ監督にグランプリ金獅子賞に加えて新人監督



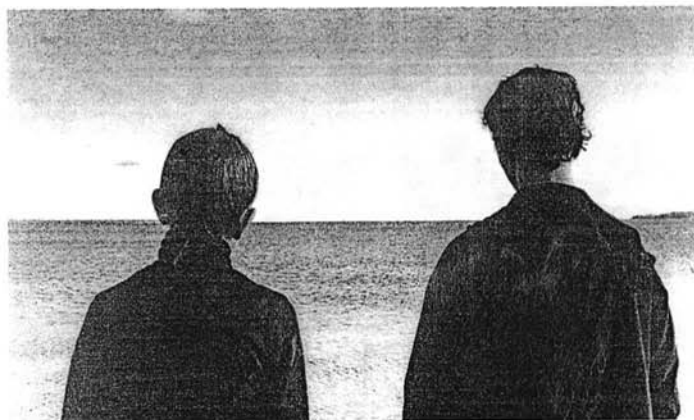
賞が授けられたとき、「映画」に精通した世界のすべての人びとが、惜しみない拍手を送り続けたと記録が残されている。

チエチエン侵略以来、「ロシア」がすっかり嫌いになっていた私だが、こんなにも大きな、こんなにも深いロシアの、こんな若い人びとが、もしかしたら、あの「チエチエン」も問い直してくれるのではないかと、そんな幻想さえ持つてしまった。

何十年ぶりで観た「映画らしい映画」。親も子も、ぜひ観てほしい。

(斎藤千代)

九月十一日から東京・日比谷シャンテシネ(〇三―三三―五九―一―五二)新宿・武蔵野館(〇三―三三―五四―五六七〇)で上映中。一、八〇〇円の上映券(両館兼用)を(あごら)で一、五〇〇円でお頒ちします。ご家族・ご友人と、ぜひ



ご活用を。お申し込みは事務局まで。(電話 〇三―三三―五四―三九四一、FAX 〇三―三三―五四―九〇一四)

ら室 ご書 あ読

沖繩差別と平和憲法

日本国憲法が死ねば戦後日本も死ぬ

大田 昌秀 著

BOC 出版刊

「私は、強い危機感を以て本書を書いた。書きながらも一種の表現しようもない絶望感にとらわれざるを得なかった。が、基地沖繩に住む私たちには、諦めたり絶望するゆとりはないのだ。それだけに、戦後半世紀以上もの間、私たちは誰も殺すことなく、また誰か

らも殺されることもなくやって来れたのは、平和憲法のおかげだということにぜひとも想起し、その護持と発展に全力を尽くしたい」

大田さんのこの結びの言葉は、A5判四六〇ページものずっしりと重く厚い本の言葉を端的に示している。「熱い思いの本」という言葉があるが、これほど熱い思いの本はない、と思うほど、深い心の凝縮した本である。

「日本全国で沖繩ほど、太平洋戦争を計画し遂行するうえで最小限の関わりしか持たなかったにもかかわらず、その戦争で最大最悪の被害をこうむったばかりか、戦後は戦後で異民族の軍政下に放置されたところはどこにもない」とスタンフォード大学ジョージ・H・カー教授は指摘しているが、その沖繩ほど、戦後の大日本帝国憲法とも戦後の日本国憲法とも無縁などころはなかったことを、膨大な資料に基づい

て克明に示している。

戦前の帝国憲法下、本土の府県では、人びとは当然の権利として一八九〇（明治23）年から参政権を行使し、自分たちの代表を国会へ送ることができた。しかし沖繩県民が参政権を行使できたのは、それより三〇年も遅い一九二〇（大正9）年からであった。戦後の日本国憲法下でも、本土の府県では一九四六（昭和21）年から国政に参加できたが、沖繩が参加したのは、それより二四年も遅れた一九七〇（昭和45）年からだった」と、冒頭、著者は指摘する。



A5判464頁、本体価格3,800円
+税

戦時下、本土を守る捨て石として、沖縄は、米軍と日本軍により、人口の三分の一に及ぶ十数万の人命を犠牲にした。それだけに、人権に立つて不戦を誓った平和憲法Ⅱ日本国憲法こそは不磨の大典として護りぬかねばならないという思いは、沖縄の人びとには格別強い。

戦時中、十代の少年兵として沖縄戦に組み込まれ、多くの戦友を失った筆者は、泣いても叫んでも決して帰って来ない過去への限らない追悼の思いをこめて、沖縄に本土が与えた理不尽を、遠く江戸時代にさかのぼって追求する。

周到に準備された数かずの史料を一つひとつ検証しながら、「沖縄差別」の根の深さを活写する迫力。「沖縄差別」をこれほど明確に証明した本は、ほとんど類を見ない。大田氏の博識は、つとに伝えられていたが、その学識の深さにも、改めて敬服する。

沖縄県知事として、今また参議院議員として寸暇のない毎日のなかで、いわば「日本国民への遺言」とでもいう深い思いをこめてまとめられたこの書は、沖縄住民からはヤマトと呼ばれている日本本土のあらゆる住民が、読み込み、読み継がなければならない貴重な一書、と言わずにいられない。それは、ヤマトがアジアに与えた（加害）を思い知る上でも大きな意味がある。

その貴重な原稿の刊行を、大田氏は、あえてBOC出版に託してくださった。

（あごろ）の会員でもある氏の、そのお志に感動して送り出すこの本を、できることならすべての会員が読みとおしていただきたい。同時に知っているかぎりの図書館・自治体への常備を働きかけてほしい。

（斎藤千代）

（あごろ会員）は一割引き。十年以上の会員は二割引きでお送りします。）

『おふくろのいる風景』

倉田 侃司 著

BOC 出版刊

母親が、八八歳になる……。

米寿です。何か祝いたい。

広島経済大学教授、倉田侃司さんは、母をみとり続けてきた六年間の記録を、自費出版することを思い立ちました。

倉田さんは、三〇年来の（あごろメイト）です。

瀬戸内の、呉の人らしい、温かでやさしい母親は、いくつかの病変を重ねて、少しずつ老いを深めていきます。

一日一日、わずかずつ、そして時には突然大きく変化する現実。倉田教授は、現実から決して目をそらしません。

倉田教授は教育学専攻の紳士です。

そして奥様は超多忙な、小学校の校長。母親の「みとり」は、いつか自然



四六版240頁・定価1,800円＋税

に、長男である倉田教授の仕事になりました。長男は、現実に立ち向かうかなしみを、毎日の日記に綴り続けます。綴ることによってその重さからしばらくでも立ち直れる――。

多分、夜が更けてからでしょう。独り日記に思いを託してようやく介護を続けてきた筆者。できるかぎりユーモラスに、できるかぎり率直に事実を書き綴ったその記録は、一見、何の変哲もない淡々とした文章ですが、ふしぎな温かさで読みの心をやすらがせます。(介護もの)という、重い印象です

が、介護が、ユーモアや優しさに昇華されていて、何度読み返しても、ある時は、ひとりであなづき、ある時は、ひとりで声を出して笑ってしまうのです。恐らくは「自らのいやし」のために書かれたであろう記録が、こんなにも「いやしを与えてくれる記録」になったとは……。

読者は、母親の周辺でお茶目にふるまう青色と黄色のインコに、いつのまにか「わが家のインコ」のような親近感を覚え、やがて入院する施設のあれこれに、ある時はホツとし、ある時は憤慨し、「ああ、日本の介護は……」などと、悲憤梗概したくもなります。

それでも、その風景は、老いという非日常、「男の介護」という言葉から想像される風景とは全く違う、静かで穏やかで、心温まる風景です。そして、その風景の中心にいる「おふくろ」さんに、「どうかお元気で！ いつまでも

お元気で！」と、声援を送りたくりますます。

女は九〇近く、男は八〇過ぎまで生きることが「平均値」になったニッポんで、こんなやすらかな日常もあったのです。

ご高齢の両親や縁者をお持ちの方ばかりでなく、自ら「老いの坂」に登りかかった方にも、ぜひとも読んでいただきたい、希有の本です。

「米寿の祝のための私家版です」とのご依頼を受けて編集を始めた本ですが、あんまりステキなので、筆者にお願いして、「私家版」の上製本のほかに、並製の普及版もつくって、広く市販することを許していただきました。

(斎藤千代)

読書会などで十冊以上お買い上げの方と「あごろ」会員の方は一割引き、十年以上の会員の方は二割引きでお頒ちします。

「eデモクラシー」への挑戦

藤沢市市民電子会議室の歩み

金子郁容・藤沢市市民

電子会議室運営委員会著

岩波書店

私が住んでいる神奈川県藤沢市には、インターネットを通して、市民が二四時間いつでも自由に発言できる「市民電子会議室」があります。

このシステムは、藤沢市が一九九七年に市政への市民参加とコミュニケーションづくりを目的として設置したものです。

ここには行政や環境、生活、ボランティア、福祉、教育、自然、歴史、趣味、イベントなど、様々なジャンルで九〇近い「電子会議室」が開設され、意見交換や情報交換が行われています。

本書は、全国でも稀な「成功例」として注目されている藤沢市の「市民電

子会議室」を取り上げ、なぜ成功しているのか、市民の声が市政にどのように反映されてきたか、その仕組みや運営方法、ルールなど、具体例をあげて、わかりやすく書かれています。

全国の都道府県と市町村をあわせて、七三三の自治体に「電子会議室」が設置されているようです。これは全国の自治体の約四分の一にあたるそうですが、うまくいっている「電子会議室」は数少ないとのこと。本書が少しでも参考になったら幸いです。

五年ほど前に、私も「バリアフリーを考える」会議室を開設しました。それまでは、それほど社会との接点が少なかった「フツーのおばさん」が、自分の思いを発言できるようになり、新しいコミュニケーションが生まれました。そこで仲間の人たちと話し合い行動して

いくうちうちに、少しずつですが住みやすい「まちづくり」が実現しているのでは……と思っています。

一般市民と行政が、どのようにして住みやすい「まちづくり」を目指してきたか。本書には、そのためのヒントが数多く書かれています。

藤沢市に限らず、誰もが住みやすい街にするために、「電子会議室」を知らなかった人や、参加したことがない人など、多くの人たちに読んでもらいたい本だと思います。

(信永圭子)



四六判 240頁 定価1,800円+税

に比べて五倍の高い数値を示している。

測定をした平良夏芽さんは「現時点では安全な数値だったが、持ち去った土を調べるべきだ。劣化ウランはα線に反応する。α線の調査をすべきだ」と語ったという。このような報告さえ、米軍側は住民には一切しなかったのだ。

名護市辺野古への米軍新基地建設に反対し続けている「ジュゴン保護基金委員会」の東恩納琢磨さんは、その日の夜の講演で「事故直後は辺野古への基地建設が急激に推進されるのではないかと心配したが、県内の意見はそうなっていない」と安堵の表情を見せた。

また、新基地建設に伴うボーリング調査を阻止して四月一九日から座り込みが続く辺野古を八月二七日に訪れたとき、座り込みテントでは「沖縄県内各地から座り込みに訪れる人が増えた」という声も聞いた。テントすぐ近

くのキャンプ・シュワブでは米軍の水陸両用車が訓練をしているところを目撃し、沖縄の人びとの気持ちに全く配慮しない、占領意識まる出しの米軍の姿をあからさまに見る思いがした。

辺野古から那覇に帰る途中で立ち寄った金武町の都市型訓練施設建設現場でも、地元伊芸区の住民は建設が始まった五月から激しい抵抗運動を続けている。現場では高速道路や民家のすぐ近くでブルドーザーがうなりを上げて工事を進めていた。流れ弾がもし住民に当たったら……と、ここでは誰もが考えざるを得ないだろう。

沖縄では今、米軍基地の（県内たらい回し）に反対する声が沸き上がっている。八月中には県内三〇か所を超える自治体で事故に対する抗議決議が挙がったが、普天間基地早期返還はどれも一致しており、県内移設に対しては、

見直し論が決議の七割を占めている。

ところが、那覇防衛施設局は八月三十一日、四月から止まっている辺野古沖のボーリング調査を九月六日から実施する方針を明らかにした。これは、沖縄の人びとの総意を無視した暴挙としか言えない行為である。

小泉首相はヘリ墜落事件後十二日も経過してから稲嶺沖縄県知事にわずか三〇分だけ会見し「沖縄の厳しい状況はわかる」と述べたが、わかるのならなぜボーリング調査を許すのだろうか。

明らかに日本の「国権侵害」である今回のヘリ事故後の米軍の処置に対して、米政府に抗議しないどころか、逆に機嫌をとるような態度に終始しているこの人は、一体どこの国の首相なのだろう。「無責任だ」「沖縄を軽く見ていう」という事故現場周辺住民の怒りの声が、この人の耳には届いているのだ

ろうか。

地元紙の記者は「今回の事故で、日本政府の対応を批判する投書が多い」と言っていたが、当然である。

九月一二日、沖縄国際大学では宜野湾市民集会が開かれ三万人が集まった。

そして辺野古にはボーリング調査阻止行動に多数の市民が集まっている。東京、大阪をはじめ、全国各地に抗議行動は広まりつつある。これは、命を守る運動である。「沖縄だけの問題ではなく、自分の問題である」と自覚する個人が増えることで、普天間基地撤去と辺野古新基地建設阻止のうねりは必ず秋の国会を動かすだろうと信じている。

（九月一日 東京 荳澤礼子）

◆秋の国会を動かすことができればいいのですが、衆参両院とも与党が多数を占めている現状のなかで、国会が私たちの望む方向に動くでしょうか。

戦後六〇年、沖縄の犠牲の上に築かれ続けてきたヤマトの繁栄の意味を、

ヤマトの人びとは本当に感じているのでしょうか。知っていれば「防衛費の増額」など、口が腐つても言えないはずです。

基本的には「独立国としての日本の確立」。そして「安保の解消」。安保は、日米どちら側からでも申し出れば、一年後には解消できる原則。それを実現できない私たち運動する側の責任をひしひしと感じます。

アジアの米軍の削減。韓国の人びとは政府も民間人も一体になって激しい抗議を続け、削減に成功しました。私たちは、なぜそれができないのか。基地の七五％を沖縄に押しつけているヤマトの人間の一人として眠れない夜が続きます。

（東京 斎藤千代）

オリンピック

◆開会式、すばらしかったですね。（歴史の重み）を感じました。ここ十数年のオリンピックで最高でした。芸術性も十分でしたし……。

（福岡・福田光子、神奈川・新井俊さんほか、多数の方から）

◆のり気でなかったオリンピックなのに、始まるとテレビに釘づけに。

「負けた負けた」より「勝った勝った」は、やっぱり元気が出る。凡人なのだと我が身のほどを知りました。

（さいたま市 太田まゆみ）

◆嬉しかったのは、初めて女性の出場者が男性を上回ったこと。しかも男性チームは出場しても野球・サッカーなど期待の活躍ができなかったなかで、女性チームは、自分たちの乏しいお金で四苦八苦しながら初出場したサッカー

ーやホッケーも活躍。初めて女子の種目になったレスリングでは全員メダル。柔道も全員メダル……と、「イザという時に強い女性」の面目躍如。(おかげで寝不足になったけど)リユーインの下がる毎日でした。感謝！感謝！

(茨城 吉田ふみ子)

◆今回日本は、初めて女性のほうが男性よりも出場者が多く、活躍も目立ったこと、日本の女性解放が進んだ結果の一つと、うれしく思いました。「人見絹枝は当時の女学生の憧れの的だったけれど、『女だてらに』と罵倒されて残念だった」と言っていた亡き母の言葉を思い出し、母に見せたかったと胸がジーンとしました。(福島 鈴木光子)

◆人口一千万の小さな国が、トルコとの争いも終わり平和の祭典。心配されたテロもなく、オリンピックは「大国よりも小国で」と、つくづく思いました。

そして一九八〇年のコペンハーゲン世界女性会議を思い出しました。七五年メキシコ、八五年ケニア、九五年北京、〇〇年ニューヨークの五つの会議の中で、断トツに良かったのは八五年のコペンハーゲン会議でした。小さくて質素で、でも心は温かさにあふれていて……。

ふと国威発揚の場だった九五年の北京会議を思い出し、〇八年の北京オリンピックが何となく心配になりました。

(東京 新田育子)

◆ギリシャについて解説していたNHKのアナウンサー、「この国の人口は一億」と言って、訂正もない。一億二千万人の日本人、人口一千万の国なんて考えられない自己チユウ発想にガク然。

(大阪 田中のぶ子)

◆ヤワラちゃん、足の重傷を押して金メダル。サスガです。ところが反響

は今イチ。四年前は、「ヤワラちゃん見たら(あごろ)を思い出した」「小さなカラダでがんばる(あごろ)が頭に浮かんだ」といった電話が事務局にジャンジャンかかってきたのに、今回はゼロ。伝え聞くところでは三億円の結婚式、トヨタの熱烈バックアップなどが、フツの市民の気持ちを、冷やしてしまったみたい。(あごろ)は今もピンボで良かった？ (事務局 H)

◆メダル数で世界第三位とか四位とか浮かっているけど、メダル上位は、皆軍事超大国。日本は世界第三位の軍事大国だったことを思い出しました。

(東京 青木まり)

◆良かったのは、世界の、名前だけ知っている国の人の顔や姿を知ったことです。あ、こんな美人の国が……なんて。小国の人が、もつともつと出てほしい。

(秋田 遠山道子)

◆敗れたら四年後のオリンピックを目指す。四年後に敗れたら八年後、それもダメなら十二年後……。そして見込みのある子を小学生の時代から鍛える。それが「勝つ」ということだった。

私たちは（私は）、選挙に負けるたびに、「あーあ」と思い、一回ごとにやる気を失っていました。これでは世直しなど、できるはずもなかった！

それに気がついたのが、オリンピックテレビ観戦での、私の一番の収穫でした。
（東京 斎藤千代）

39・5度

◆暑かったですね。今年の夏。東京など、アフリカより暑いのでは、と思う毎日でした。冷房のない我が家は、毎朝、顔に《塩》が出来ていました。

そしてついに日本新記録達成！

なんと39・5度になったのです。肺炎にでもなった気分というか――。

でも39・5度で日本新記録？

たしか山形あたりで41度が日本記録と言っていたハズ……。と思っていたら、山形方式で計算すると42度以上になるのだ、とテレビで解説。やっとナットク。でも、42度でも39度でも、ともかくあの暑さは、もうコリコリ。

（東京・オリンピックを見すぎた女）

◆39・5度のその日、《あごろ》事務局は、突然大音響とともに停電。ついに当局のイヤガラセが《あごろ》にまで至ったか……。と観念しましたが、停電は、ビル全体。原因はなんとネズミ一匹。

暑さに迷ったのか、白昼、配電線にもぐりこみ、花火となった……。とのこと。

働き者揃いの《あごろ》のスタッフたちは、シメタとばかり二時間の仮眠。ヌケ出してヨソのオフィスをのぞい

たら、どこもドアを開け放し、ウチワでフーイー。ローソンはアイスクリームがぬるくなっていました。値引きはゼロ。
（事務局 天野じやく子）

◆39・5度になっても男性たちは背広にYシャツ。湿度の高い日本で、英国紳士のマネは土台ムリ。もういい加減に夏の背広は廃止したらどうか。そうすれば軽装も失礼にはあたらない。経済界のおエライさん方たち、決断を！

（千葉 綿津靖子）

二とば

◆小泉首相よ。アメリカの副大統領になど、なつてほしくないネ。

マイケル・ムーア

◆世界の暴力のもとで裸の子どもたちが殺された（北オセチア）。

大江健三郎

「あいら」を読んで

◆「闇を照らす閃光Ⅱ」〔296号〕をお送りいただき、まことにありがとうございます。エスペランティストの側からは早い時期に利根光一さんが「テルの生涯」をまとめておられました。

先日北京でのエスペラント世界大会に参加しました。会場でも『Verda Majo 著作集』が並んでいました。テルは、やはり英雄ですね。

お手数ですが「閃光のⅠ」「巡る旅」もお送りいただきたく、五〇〇〇円同封します。残金はわずかですがカンパです。

（東京 荻原洋子）
◆長谷川テルの特集第三弾。テルの足跡を求めて女性四人が旅をする。テルの娘・暁子さん、木田さん、坂井さん、澤田さんの四人の旅びとの文章は、聖書の四つの福音書のように、重なりつ

つもそれぞれの視点があり、面白かった。「長谷川テルがライフワークです」という澤田和子さんの文には、甘美なタイトルがついている。「小雨の上海霧の重慶」

わたしには、上海よりも、重慶のお話が印象深かった。印象深い、では言い足りないだろう。霧の街を、テルさんあるいは神——つまりこの世を超える存在——が、四人の旅びとを導いたのでないか、というのが偽らざる感想であつた。ソクツとした。そんな重慶でのエピソードであつた。

重慶といえば、日中戦争の折、日本軍が爆撃をしたところだ。この無差別爆撃がお手本と言うか報復と言うか、ともかく最初にあつて、後の日本中への米軍の空襲になったと聞いたことがある。重慶なかりせば、東京も大阪も名古屋も広島、長崎もああではなかつ

たのではないかと……と歴史の顛末を知っている者は思う。

日本兵に向かって「無駄にあなたたちの血を流さないで下さい」と反戦の放送をしたテルが重慶に住んでいたというのは、歴史の因果を感じる。

さて、旅びと四人衆の霧の重慶である。テル夫妻が往時住んでいた「頼家橋」を訪ねる地元の人に聞いても「来家橋？知らない」と言う。別に日本人へのいぢわるではない。タクシーの運転手やホテルの従業員ですら、なのである。

四人の意気消沈も無理はない。「この旅はなんだつたのか」。暁子さんの嘆息が耳元で聞こえるようだ。おまけに雲助にまで遭ってしまう。ところが、この世の知恵を超える旅の展開は、ここからだつたのである。木田さんが「紅岩革命紀念館に行こう」と言う。その

言葉に澤田さんは「きつと何かが見つかる」との思いを抱く。すでに澤田さんは自分でも気づかずにちよつとした預言者だ。そして記念館。

晝子さんが叫んだ。やはり何かは見つかった。

「父(テルの夫・劉仁)の写真がある」それは、四人衆にとつて大秘宝が隠されている扉を開ける鍵であつた。写真を発見し叫んだのが他の三人ではなく、娘の晝子さん、というのもドラマチックだ。劉仁・テルの娘が見つけた鍵によつて、扉はまさに開かれた。

写真をきつかけに、資料は見つかるは、テルたちの旧居が見つかるは、なのであつた。

「求めよ、さらばあたえられん。捜せ、さらば見つからん。たたけ、さらば開かれん」神の言葉はほんとうらしい。四人の情熱の力が、テルの謎の扉をま

たひとつ開けたのだと思う。

(横浜市 前川ヨウ)

「近況報告」

◆新潟では八月に入り、革新無所属の黒岩宇洋参院議員が、十月の新潟県知事選へ出馬を表明。「野党分裂の危機」とマスコミでは大騒ぎ、保守の思う壺にならぬようにと懸念しましたがその後、黒岩参院議員は出馬を断念、国会での大事な一議席を守つてほしいと願つていた一人としてホツトしました。その結果、多賀秀敏さん(元新潟大学教授・現在早稲田大学教授)が民主・社民・連合・市民統一候補として決定、黒岩参院議員は選対本部長に。(あごらめいと)の母、黒岩秩子さんも選対事務所で大忙しです。多賀候補者とは、私が九一年に企業城下町での町議選に当選した時からの

お付き合いで、革新知事の誕生を願い、日々応援に動き回っています。

(新潟県青海町 鈴木勢子)

◆東京は猛暑だと報道されていますが、大丈夫ですか？

こちらも厳しい陽射しが座り込みテントの中まで焼きつくすようですが、海からの風があるので、なんとかしのげます。(まもなく座り込み百日になります) (沖縄 浦島悦子)

三〇〇号記念

カンパとメッセージ 大募集!

メッセージは一行でも二行でも……。

(同封ハガキのご利用もどうぞ)

カンパも、千円でも二千円でも……。

おそまきながら行事の企画もお知らせください。(観たい映像、聞きたい講演者など)

人材募集中!

◆編集のベテランの方(非常勤でもかまいません)。

◆雑用が大好き。月一金 毎日九時から働ける方(半日でも可)

もちろん有給です。ご希望の報酬をお知らせ下さい。

『編集後記』

◆あせらずゆつくり確実な運動を。

「白いリボンは平和のマニフェスト」——浮田久子さんをお迎えしての学習会から発足した拠点活動は、いつも東京の編集部の方々に負んぶに抱っこでお世話になりながら、お陰さまで、276号、278号、281号に続けて297号、4回目の発信となりました。

藤沢の地の塩のような活動を、浮田さんの思いと合わせて拠点からの発信としたい。——そんな私の願いに添えて、超

ご多忙な中ご執筆くださった皆さまに心から感謝いたします。

山川菊栄先生が一九三六年から四十年余りを過ごされた藤沢の地には、ゆかりある方が今もいらつしやいます。山川先生とのつながりの中で活動されてきた皆さまとの出会い、(あごろ)のご縁を、この号を通じて、一人でも多くの方に伝え、育てられたら幸いです。

「語り部としての使命を感じて」と、

熱い思いで語り、原稿にまとめてくださった浮田さんを囲んで、感謝の集いも準備しています。ご一緒に感想を話し合ってみませんか?

この号をきつかけに、新しい出会い、つながりが生まれることを楽しみにお待ちしております。(山田敦子)

◆(湘南号)編集のために藤沢の市民運動の数かずを調べることになり、あわせて自分史も考え直しました。よい

チャンスを与えていただいて感謝しています。(佐藤幸子)

◆地域で活動していらつしやる皆さんのそれぞれのご活動は、運動をする者にとつて最高の情報、そして何よりの励まし。(新連載)「地域が日本を変える」とともに、この号で全国によい発信ができることが、とても嬉しく、(湘南)に感謝の気持ちでいっぱいです。

(千)

◆雑誌が売れない時代とか。(あごろ)も悩んでいます。平和な世界、元気な(あごろ)に!

(く)

『297号の編集協力者』

芦澤礼子/天野尚美/内田文子

内田大介/荻原有希/奥平せい子

黒澤照代/桑原ちえ子/斎藤千代

斎藤 涼/佐々木康子/澤田和子

中島克子/家後厚子/綿津靖子

横井久美子 35 周年記念コンサート

歌は私に教えてくれた
この世にどれほどの悲しみと痛みがあるかを
歌は私を清めてくれた
命あるものはすべて善きことのために存在すると
たとえ 大地が悲鳴をあげ
憎しみが大空を覆っていても
こんなにも私が 人生を美しく
人々を愛しく感じるのには歌があったから
歌にありがとう 35年もありがとう

歌って 愛して
時代の風のなかで、共に生き、歌い続けて35年。歌は時をこえて。
まなざしは時代をつらぬき、うたごえは今も聞く人のこころを動かす。
歌って愛して、夢を見ながらたたかいたい。

SING the LOVE LOVE the SONG

Special Guest



出演 ● 安田雅司郎 (ギター) / 劉哲志 (ピアノ)
杉田真実 (ヴァイオリン) / 小林展明 (ベース)

特別出演 ● Sandra Joyce (バウロン、歌手)
Niall Keegan (アイリッシュフルート)

サンドラ・ジョイス、ナイル・キーガンは、共にアイルランドのリマリック大学で、アイリッシュミュージックの講座をもつ一方、アイルランド伝統音楽のすぐれた演奏家として海外でも活躍中。

2004年11月21日(日)
東京国際フォーラムCホール (03-5221-9000)

● JR山手線・京浜東北線有楽町下車3分

PM 1:00開場 PM 1:30開演 / 入場券 指定席ヘア10,000円、指定席5,500円、自由席3,500円 (当日4,000円)

● 主催 久美子と輝き隊・東京

● 後援 株式会社音楽センター

● 横井久美子事務所 〒186-0002 東京都国立市東3-18-15 TEL 042-573-3465 / FAX 042-577-7410
kumiko@y.email.ne.jp <http://www.asahi-net.or.jp/~1g4k-ykl/>

〈あごろ〉は、人と人が出会うつひろば――

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌『あごろ』を軸に、よりよい自分と社会を目指す ゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊『あごろ』の誌代込みで月額七百元。一年前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は二千元。ハガキ・FAX・メール・電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOC〉のご登録も、どうぞ……

一九六〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごろ〉会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区一〇九一四 中公ビル

電話 03・3354・3941 (代) FAX 03・3354・9014

Eメール XLV05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp

ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agoral/>

あごろ 297号 (9月号) 毎日生きてるお互い同士

●編集 あごろ新宿

●発行 2004年9月20日

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-MAIL XLV05467@nifty.com

●定価 本体1000円+税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごろ編集部



9784893061478



1920036010004

ISBN4-89306-147-X

C0036 ¥1000E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,000円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 FAX3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

男女共同参画の

BOCシニアも

スタートしました。

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

倉田侃司 おふくろのいる風景

四六判 240頁
1800円(本体)

米寿を迎えた母の、六年にわたる介護の日々を、温かくユーモラスに綴る、六五歳の大学教授の(男の介護)。読むほかに、自分もやさしくなる本。

「私は強い危機感を以て本書を書いた。書きながらも表現しようもない絶望感にとらわれざるを得なかった。が、基地沖縄に住む私たちには、諦めたり絶望するゆとりはないのだ」——少年兵として沖縄戦を戦って以来の憤りと悲しみをこめて、膨大な資料に基づき、明治憲法からも日本国憲法からも適用除外されていた「沖縄の現実」をえがく。本土の人間は一人残らず読んでほしい。

大田昌秀 沖縄差別と平和憲法 日本国憲法が死ねば「戦後日本」も死ぬ

A5判 464頁
3700円(本体)

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

TEL 03-3354-3941 FAX 03-3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティのBOC出版部